巻頭言

新学習指導要領に思う

北原保雄（きたはらやすお）
筑波大学名誉教授

いよいよ高校においても新学習指導要領による教育が始まる。そして、国語科では「国語総合」が共通必修科目になる。現在の指導要領では、「国語総合」と「国語表現Ⅰ」が選択必修科目で、「国語表現Ⅰ」を選択した場合、標準単位数は2だ。わずか2単位だけで、しかも「国語表現」だけで国語力の向上は期待できるか。はなはだ疑問だった。

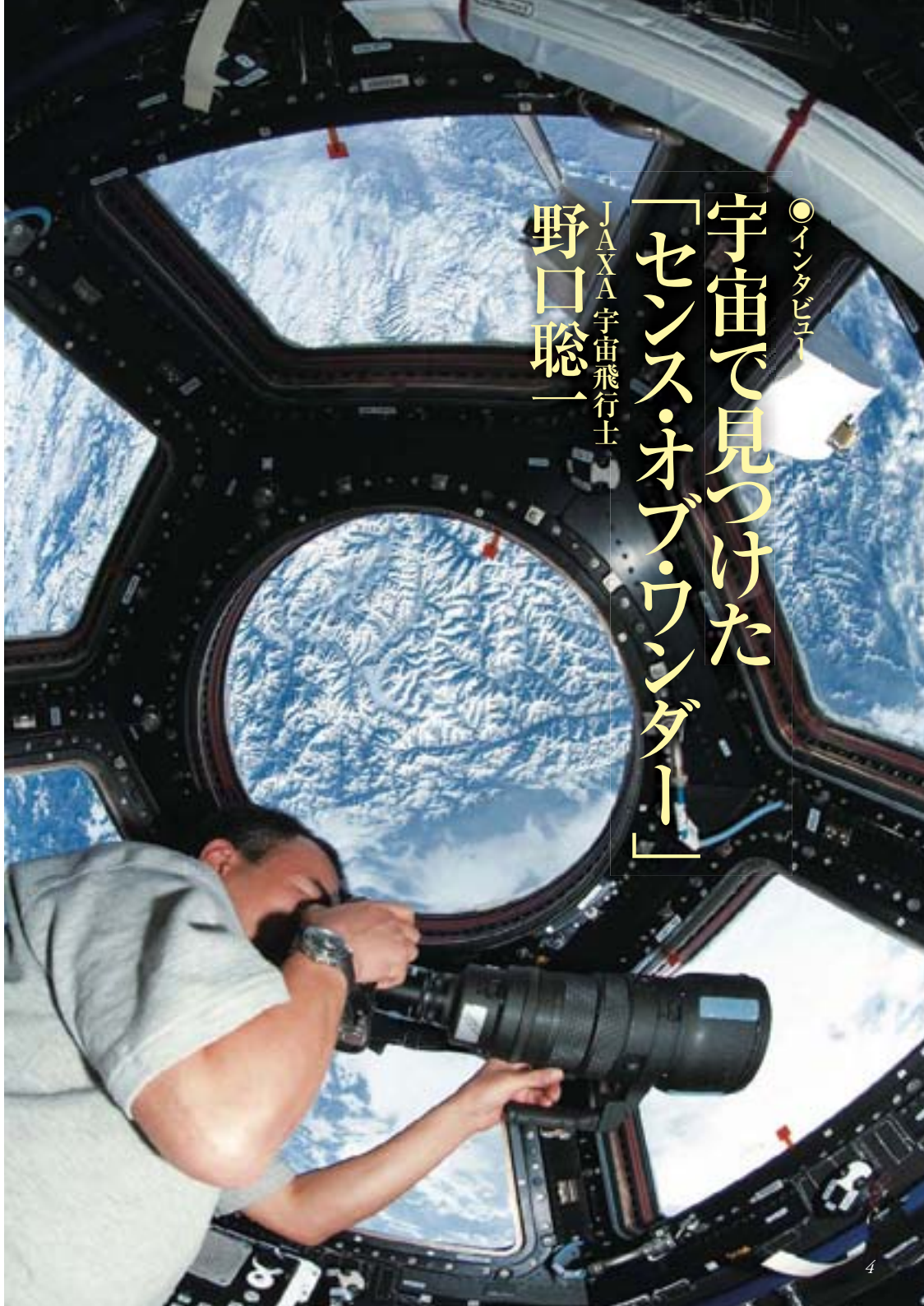
今回の改定でも共通必修は4単位だけだ。国語力の低下が叫ばれながら、これだけの授業時間数でどれほどの指導ができるのか。もちろんこれは最少単位数だから、実際にはこれより多くの科目、単位が設置されるだろうし、そうでなくてはならない。国語力が落ちていると言われる原因の一つに国語の授業時数が極端に少ないことがあるのは確実だ。

新指導要領の「国語総合」には、指導すべき重要事項が網羅されていて遺漏がない。これに準拠した教科書を作るのは大変だし、教室で教えるのも容易ではない。しかし教師たるものときどき読み返して指導内容を確認することが大切だ。ついでに中学校の指導要領も見ておくのがいい。2「内容」に新設された［伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項］などは、小中学校と連続しているものだ。この新設の事項はア「伝統的な言語文化に関する事項」、イ「国語の特徴やきまりに関する事項」、ウ「漢字に関する事項」の三つからなるが、アに新しい観点が加わったくらいで、イ・ウは従前［言語事項］として示されていたものだ。だから、指導の内容はあまり変わっていない。むしろ小中学校の変更を知っておくことの方が重要だ。

イ「国語の特徴やきまり」についての指導は大切だ。「伝統的な言語文化」と一緒に括られてしまって、［言語事項］が埋没しかねないのが心配だが、言語事項の知識・能力があって適切な表現も的確な理解も可能になる。しかし、生きた言葉、現在使われている言葉についての指導はもっと重要だ。そう思って探してみると、3「内容の取扱い」の（2）のイに「口語のきまり、言葉遣い、敬語の用法などについて、必要に応じて扱うこと。」とある。「内容」ではなく「内容の取扱い」の中にある。しかも（2）は「話すこと・聞くこと」の指導について「配慮するものとする」という事項だ。要するに、話し言葉の指導において、必要に応じて扱うように配慮することというのだ。

中学校までにも学んできたことだから、高校では必要に応じて扱えばよいというのだろう。しかし、中学校までに学んできたことと高校で学習すべき内容とは異なる。また昨今、若者の言葉の乱れが問題になっている。話し言葉だけでなく書き言葉についても同様だ。言葉の遣い方を知らない若者があふれている。「口語のきまり、言葉遣い、敬語の用法など」についての丁寧な指導が強く求められている。指導は「必要に応じて」ではなく常時必要である。教師と教科書が総力を上げて正当な日本語を守らなければ日本語の将来は危ない。

●きたはら　やすお
1936年生まれ。日本語学者。大修館書店教科書編集委員代表。主な編著書に『日本語助動詞の研究』『明鏡国語辞典』など。近著に『問題な日本語　その4』（以上、大修館書店）『岐点の軌跡 わが歩み来し道 』（勉誠出版）がある。



◉インタビュー

宇宙で見つけた「センス・オブ・ワンダー」

JAXA宇宙飛行士 野口聡一

野口聡一（のぐち　そういち）
JAXA宇宙飛行士。1965年生まれ。2005年にスペースシャトル、ディスカバリー号に搭乗。2009年12月から約5か月半にわたり、国際宇宙ステーション（ISS）に滞在した。

新課程にともなって登場した『新編国語総合』（国総314）を開くと、まず目に飛び込んでくる、青く美しい地球。巻頭教材となっている「ワンダフル・プラネット！」は、野口さんが宇宙で撮影した息を呑むような写真と、ご自身の体験や思いをつづった印象深い文章から成っています。

この作品の背景と、高校生に伝えたいことをお聞きしました。

――このたびは、『新編国語総合』の巻頭に、「ワンダフル・プラネット！」を掲載させていただき、ありがとうございました。

まず目に留まるのが、見たこともないような不思議な写真です。

我々が知らない、日本人には全然縁のなかったような場所で、はっとするような色合いや形に出会いました。漫然と見ているとたぶん気がつかないでしょう。八〇〇ミリぐらいの望遠レンズを使って、さらにデジタル処理で拡大して、一六〇〇ミリ相当ぐらいまで上げてみる。すると部分を切ったときの驚きがあるんですね。「なんでこんな色合いになるんだろう」という。

あと、光の具合ですね。構図とライティングによって、すごく珍しく見える写真になったんじゃないかな。当然ながら、うまく撮れていない写真のほうが圧倒的に多いのですが、その中で、意外な形や、意外な色、意外な光が出てきたものを取り上げました。

実際、自分でファインダーを通して見たときに、「これはなんだ？」っていう、驚きがあるんですよね。たとえばこの写真、冬のウクライナ（小誌巻頭参照）ですが、寒い景色だなと思いつつ、ファインダーを覗いたときに、そこに広がる矩形の不思議なプリズムのような景色があって。シャッターを押す瞬間に「これおもしろいな」と気がつくわけですよ。おもしろいなと思ったものは、あとで見直すときも、「こういう形で撮れていたんだ」と感じますね。

――文章の中にも印象的な言葉がちりばめられています。初めて宇宙に行ったとき、「五感が研ぎ澄まされ」「光を肌で感じ、音で寒さを感じた」という表現がありますが、このときの感覚はどんなものだったのでしょう。

まず、五感が研ぎ澄まされる前提として、宇宙というのは、すごく感覚的に制限されていて、入ってくる情報が単調な世界であるということがあります。基本的に宇宙は真っ暗な世界で、太陽の光を浴びている部分だけが輝いている。また、空気がないので、宇宙から伝わってくる音はない。

写真を撮る野口さん（『新編国語総合』P.16より）▶

それから、もうひとつ大事なのは、ふだん人間は、何もしなくても、重力をちゃんと感じているということです。目をつぶっても立てるし、朝になったら自然に起き上がれる。重力をちゃんと感じているからできることです。でも、宇宙ではその重力がない。それは、すごく不自由で感覚が制限されている世界なんです。

その最たるものが船外活動で、宇宙服だけ着て外に出ると、お面みたいなものもつけているので視界も限られているし、音もないし、重力もないし、触覚も限られている。そういうときに、限られた感覚器官を相互に補い合って、自分のいる場所とか、状態をなんとか察知しようとするわけですよ。それが五感が研ぎ澄まされる感じです。

太陽を浴びたときに、通常は目に入ってくる光の量でわかるわけですよ、今、昼か夜かってね。でも、宇宙では、目からの情報だけではなくて、背中に光を浴びたときに、太陽の光が当たっているところと当たっていないところの温度差がすごくあるわけです。極端な話、宇宙服がやわらかくなってくるような感じでわかるわけです。景色は暗いけれど、「いま背中に光が当たっているな」ってわかる。

音についていえば、音は基本的に全くないわけですよ。何も聞こえない。ただそこで、手袋ごしに手をあてたときに伝わってくる、振動なり、音のような感覚はある。そのときにやはり同じように、温度であり、寒さであり、暖かさであり、ほかのクルーの動きであったり、そういう情報を全部指先から感じ取れるということがある。

――「人生で最も大事なのは、センス・オブ・ワンダーではないか」とお書きになっています。

「センス・オブ・ワンダー」というのは、何かに対して感動する心であり、驚きの気持ちですね。美しい地球の景色に対して、素直に驚ける、素直に感動できるような心を持つことが大事だと思います。「別に珍しくないんじゃない」なんて白けずに、「あ、すごい」と感じられるかどうか。「こんな景色は見たことがない」と感じるかどうかですね。「ふーん、別に、そんなに」って言ってしまうことで逃してしまっている感動って、かなりあるんじゃないかなと思います。

ゴールデンウィークの東京の夜
（『新編国語総合』P.13より）

ウクライナの畑の風景
（『新編国語総合』P.14より）

びっくりするとか、すごいって思うことの裏には、美しいものを求めていこうという気持ちがある。だからこそ、美しさに対して反応しているわけです。そういう心を大事にしていってほしいなと思いますね。自然に対する探求心でもあるだろうし、自分の知らないものに挑戦していこうという気持ちでもあると思います。

そういえば、リップスライムというグループが「センス・オブ・ワンダー」っていう曲を出しているんですが、それもこの本からインスパイアされたものなんだそうですよ。

――野口さんご自身の高校時代は、どんな学生だったのですか？　国語はお好きでしたか？

今は理系の仕事をしていますが、高校一年生ごろは、国語のほうが好きでした。文系のほうが向いているんじゃないかと思っていた時期もあるんです。でも、古典は、ほんとにきらいでした。

――そうですか(笑)。

古典があるから、やっぱり駄目だっていうので、文系をやめたんです。むしろ大人になると、古典の味わいは、すごくわかりますね。高校生のときはまさに受験勉強中心で、古典の助詞とか助動詞とか、一生懸命、試験対策として習わされますね。でも、そういう下地があったからこそ、大人になってから、能や狂言の世界がすごく好きになって、古典に戻ってきた。やはり、高校の頃に一応習っていた知識が役に立っているなと思います。はっきり言って、数学とか物理より、古典のほうが、今の生活を豊かにするということでは、ずっとずっと意味があったんじゃないかなと思います。だから、古典、僕もきらいだったけど、勉強しておいたほうがいいよ、と言いたいですね。

――自分が高校生だった頃と今の高校生たちとの違いについて、感じていらっしゃることがありますか。

今は、いろんな意味で情報過多なん

毎日見ても、地球は新しい。
知らない景色をどんどん作り出し、
僕に見せてくれる。
それは地球が〝生きている〟ということなんだ。
「ワンダフル・プラネット！」野口聡一

ですよね。僕たちが高校生のときというのは、三〇年ぐらい前の話ですが、当時、偉そうに大人に反発したりしても、職業の実態や大人の社会のことについて、実は全然知らないままで大学に行ったりしていました。

それに比べて今の高校生は、ネットで息をするように情報を吸収しているので、いろんなことを知っていると思うんですよ、間違いなく。現代では、われわれ大人が接する情報とほとんど同じ情報に、高校生もアクセスできると思うんです。ただ、情報があるからといって、そこから有益な知識なり、方針というのを引き出せるかっていうと、そこは別の話になる。僕たちの時代は情報そのものがすごく少なくて、その材料がないところで一生懸命考えていた。今は情報は溢れるほどたくさんありますが、その情報をうまく取捨選択して、ほんものの情報を引き出し、そこから役に立つ知識なり、英知なり、方針なりを出していくということを、もう少し教えてあげたほうがいいのかなという気がします。

――この教科書で学ぶ高校生へアドバイスを。

まさに社会に出る前の段階で、進路について悩む時期だと思いますが、あまり狭い視野で短絡的に物事を見ないで、ということかな。その先の長い人生を考えたときに自分がどういう人生を送りたいか、どういう大人になりたくて、どういう仕事をしたいかを、まず見据えてから、仕事なり、進路なりを決めていってほしいなと思います。あまり目先のことばかりにとらわれずにね。さっき古典の話をしましたが、いま興味がないことでも、先にいってすごく役に立つこともある。そういうことも含めて、自分が将来どういう大人になりたいかを考えてくれるといいなと思いますね。

――ありがとうございました。

（二〇一二年三月二八日　JAXA東京事務所）

写真出典：JAXA／NASA

新学習指導要領と「国語総合」

鳴島　甫（なるしま　はじめ）
文教大学教授

1　国語科改善の基本方針

平成二〇年一月の中央教育審議会の答申（以下「答申」という）において、国語科改善の基本方針が示されたが、その冒頭には次のように書かれている。

国語科については、その課題を踏まえ、小学校、中学校及び高等学校を通じて、言語の教育としての立場を一層重視し、国語に対する関心を深め、国語を尊重する態度を育てるとともに、実生活で生きてはたらき、各教科等の学習の基本ともなる国語の能力を身に付けること、我が国の言語文化を享受し継承・発展させる態度を育てることに重点を置いて内容の改善を図る。

特に、言葉を通して的確に理解し、論理的に思考し表現する能力、互いの立場や考えを尊重して言葉で伝え合う能力を育成することや、我が国の言語文化に触れて感性や情緒をはぐくむことを重視する。

「特に」以下の部分が肝心なことは言うまでもないが、それ以前の文言においても「実生活で生きてはたらき、各教科等の学習の基本ともなる国語の能力を身に付けること」というのも見逃してはならないものである。

2「国語総合」改訂の要点

答申に示された国語科改訂の要点のうち、「国語総合」に関する項目にしぼると次のようになる。

① 共通必履修科目

必履修科目として、これまで「国語表現Ⅰ」及

び「国語総合」のいずれかを選択履修させていたのを改め、「国語総合」を共通必履修科目とした。

② 言語活動の充実

これまでは内容の取扱いに示していた言語活動例を内容の（2）に位置付け、再構成している。これは、内容の指導に当たって、（1）に示す指導事項を（2）に示す言語活動例を通して指導することを一層明確にするとともに、各教科・科目等における言語活動の充実に資するためである。

③ 言語文化に関する指導の重視

小学校及び中学校と同様に［伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項］を設ける。

このうち特に今回の「国語総合」改訂で強調されている「言語活動の充実」と「伝統的な言語文化に関する指導の重視」を取り上げて見ておく。

3　言語活動の充実

答申の「7．教育内容に関する主な改善事項」の「（1）言語活動の充実」には、「各教科における言語活動の充実は、今回の学習指導要領の改訂において各教科等を貫く重要な改善である。それぞれの教科等で具体的にどのような言語活動に取り組むかは8．で示しているが、国語をはじめとする言語は、知的活動（論理や思考）だけでなく、5．（7）の第一で示したとおり、コミュニケーションや感性・情緒の基盤でもある。このため、国語科において、これらの言語の果たす役割に応じ、的確に理解し、論理的に思考し表現する能力、互いの立場や考えを尊重して伝え合う能力を育成することや、我が国の言語文化に触れて感性や情緒をはぐくむことを重視する。」とある。

ここで肝心なことは、これまで言語の教育は国語科と英語科が担ってきたという思いが強いが、これからは各教科等の言語活動を充実させ、学校教育全体で「思考力・判断力・表現力」と関わる言語力（国語力）をはぐくんでいこうとしていることである。例えば、「（1）言語活動の充実」の次に示されている「（2）理数教育の充実」の中にも、「論理や思考といった知的活動の基盤という言語の役割に着目した場合、『比較や分類、関連付けといった考えるための技法、帰納的な考え方や演繹的な考え方などを活用して説明する』『仮説を立てて観察を行い、その結果を評価し、まとめ表現する』といった言語活動が重要であり、これらの活動を行う算数・数学や理科の役割は大きい。」とあることからも明らかだろう。もちろんその中核となるのが国語科であるのは言うまでもあるまい。

しかし、新しい改善事項であるがゆえに「教科書において、このような学習に子どもたちが積極的に取り組み、言語に関する能力を高めていくための工夫が凝らされることが不可欠である。」とも述べられている。大修館の「国語総合」においても、それらの基盤となるべく各種工夫を凝らしているところであるが、それらをコンパクトに示したのが別表（10頁）である。

4　伝統的な言語文化の指導の重視

国際化社会の中で、自国の文化に関心を持つ社会人の育成は欠かせないことである。しかし、「平成一七年度教育課程実施状況調査（高等学校）」で行われた「質問紙調査」では、七割以上の生徒が古典（古文七二・七％、漢文七一・二％）を嫌っているという結果が出ている。日本全国、約三万人を対象とした調査であり、しかも、三年前に行われた同様の調査でも同じような数字が出ていた。全教科中最も嫌われている古典というのが現状である。

これを克服すべく「国語総合」での［「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」の指導に当たって配慮すべき事項］の中で次のように述べられている。「古典を読み味わうためには、古典を理解す

「話す・聞く」「書く」をコンパクトに提示した「表現の窓」

国語総合 現代文編／精選国語総合	新編国語総合
①話すこと・聞くことの基礎	①対話からはじめよう
②書くことの基礎	②感想をもとに話し合おう
③自分の考えを話そう	③調べたことを報告しよう
④手紙を書こう	④手紙を書こう
⑤調べたことを報告しよう	⑤司会者を立てて話し合おう
⑥意見を論理的にまとめよう	⑥自分の考えを話そう
⑦司会者を立てて話し合おう	⑦資料をもとに文章を書こう
⑧資料をもとに文章を書こう	⑧アンソロジーを作ろう
⑨発表の方法の進め方	⑨本のＰＯＰを作ろう
⑩本のＰＯＰを作ろう	⑩意見を論理的にまとめよう
さまざまな学習場面で随時参照できるよう、教科書巻末に位置づけている。	自然な学習活動が展開できるよう、関連の深い単元の末尾に位置づけている。

「古典に関連する近代以降の文章」の扱い

教材名	著者	国語総合 古典編	精選 国語総合	新編 国語総合
古典の魅力	野村萬斎		○	○
なんてステキな光景なの！ ―春はあけぼの	山口仲美			○
壇の浦の戦い ―『平家物語』を読む	永積安明			○
百人一首	大岡信（現代語訳詩）			○
「和歌」という言葉の意味	大岡信	○	○	
漢文のすすめ ―未来を考えるヒント	加藤徹			○
春眠暁を覚えず	一海知義			○
勉強	一海知義		○	
桃いろいろ	一海知義	○		
論語 学而第一	桑原武夫	○	○	○

脈々と受け継がれてきた伝統的言語文化を実感することができるよう、魅力的な著者による古典への誘いや解説、現代語訳などを随所に位置づけている。『新編国語総合』の漢文編では、故事成語や漢詩の単元に、北原白秋、井伏鱒二、土岐善麿、会津八一、佐藤春夫らの訳詩も添えられている。

「古典の窓」

国語総合 古典編／精選国語総合	新編国語総合
芥川龍之介の『今昔物語集』発見	描かれた古典
ことば遊び――なぞなぞ	ことば遊び――なぞなぞ
恋愛と結婚	恋愛と結婚
『平家物語』の世界	『奥の細道』の旅
古典作品にみる旅――古代から近代へ	

古典をより身近に感じてもらうためのコラムとして、随所に設置してある。

るための基礎的・基本的な知識及び技能を身に付けていなければならないことは言うまでもない。しかし、従来その指導を重視し過ぎるあまり、多くの古典嫌いを生んできたことも否めない。そこで、指導においては、古典の原文のみを取り上げるのではなく、教材にも工夫を凝らしながら、古人のものの見方、感じ方、考え方に触れ、それを広げたり深めたりする授業を実践し、まず、古典を学ぶ意義を認識させ、古典に対する興味・関心を広げ、古典を読む意欲を高めることを重視する必要がある。そして、そのような指導を通して、古典を理解するための基礎的・基本的な知識及び技能を身に付けさせていくことが大切である。」

古典を愛するあまり古典嫌いを生むという欠陥を是正すべく、大修館の「国語総合」も別表のように「古典の窓」を設け、古典に関しての「近代以降の文章」の教材を設けてある。

以上、新学習指導要領において「国語総合」がどう変わるのか、その概略と教科書としての対応について述べた次第である。

国語科なんでもQ&A

Q 限られた授業時間数で、長い小説を扱うには？

長い小説（例えば二段組で二〇～三〇ページのもの）の場合、授業で扱いたくても、時間数の関係であきらめざるを得ない場合がしばしばあります。限られた時間数で、分量の多い小説をうまく扱う方法はないでしょうか。

大分県・32才男性、他

A

高草真知子（たかくさまちこ）
麗澤大学・麗澤中学高等学校　講師

確かに「舞姫」や「こころ」を丁寧に扱おうとすると、二学期中かかってしまいますね。「もっと短時間で読んで、他の作品も読ませたい」という方には、次の方法をお勧めします。私はこのやり方で「舞姫」を六時間（五〇分授業）で読みました。

まず、「夏休みに『舞姫』の全文を読む」という課題を出しておき、休み明けに「あらすじ確認テスト」（あらすじに空欄を作り適語を選ばせる）を実施します。どの程度読めているか確認する意味もあるのですが、このあらすじを読めば「舞姫」の全体像がつかめて、本文に入りやすくなるからです。

次に、各教室の学級文庫に「舞姫」のコーナーを設け、『現代語訳　舞姫』（井上靖、ちくま文庫）、『鷗外の「舞姫」』（角川ソフィア文庫）、漫画『舞姫、うたかたの記、文づかい』（一友社名作劇場3）等をそろえます。

さて、授業では、あの有名な冒頭「石炭をばはや積み果てつ。……その概略を文に綴りてみむ」は割愛します。難解な上に、前後関係がややこしく、早々と脱落者が出るからです。そこで、「余は幼きころより……ベルリンの都に来ぬ」から読み始め（一時間）、自我に目覚め、仲間からの中傷を受けて孤立する場面を読み（二時間）、エリスと恋に落ち、免職になったところへ母の訃報が飛び込み、人生最大の危機の中で二人が「離れがたき仲」となるまでを読みます（二時間）。その後は一気に最終章に飛び、エリス発狂と二人の破局になだれこみます（一時間）。かなり強引な展開ですが、中間考査に間に合わせるための苦肉の策でした。

抑制のきいた格調高い文語体とドラマチックな悲恋物語は、「舞姫」ならでは。生徒も結構はまります。別の視点で別の場面を切り取って読めば、また違った世界が見えてくるかもしれません。

本校では「こころ」を扱うときは、音読だけの所と丁寧に読解する所を決めて、教科書の全文を読んでいます（八時間前後）。また、ある学校では「星の王子さま」のキツネの話を重点的に読み、話し合ったり感想を書いたりしているそうです。

このコーナーでは、国語科にまつわる疑問・質問に、大修館の教科書編集委員が親身にお答えしていきます。ご質問は小社「国語教室Q&A係」まで。

大修館 新「国語総合」の魅力

座談会

新しい「国語総合」教科書はどうなるのか？　それぞれの特色は？　どんな教材が入ったのか？　大修館の編集委員のうち現役の高校教員でもある先生方三人に、新教科書の見どころを語り合っていただきました。

三宅義藏（みやけよしぞう）
高草真知子（たかくさまちこ）
竹島千春（たけしまちはる）
（聞き手＝編集部）

『国語総合 現代文編 古典編』（国総 311・312）※文中では『分冊』

『新編国語総合』（国総 314）

『精選国語総合』（国総 313）

質量とも最高峰！『国語総合 現代文編 古典編』（『分冊』）

――では初めに、『分冊』の特徴から。

高草◆　『分冊』は「完全ジャンル別」で評論と小説が分けてあります。

三宅◆　従来の構成だと、「次、評論やるぞ」っていうときに、評論と小説が飛び飛びに並んでいて探しにくいけれども、「完全ジャンル別」だとひと目で見つけられる。

高草◆　例えば、「今度の中間テストまでに評論一つと小説一つ、どれを扱おうか」と探すときにすごく便利です。

竹島◆　量が多いのもいいですね。

三宅◆　教科書の編集をやっていると、ページ数や単元の性格による制約があって、すごくいい教材でも載せられないことも多い。この教科書は制約が少なくて、「ぜひ載せたい」という教材を、かなり思い通りに載せられた。編集していてわくわくしました。

高草◆　載っている評論や小説は、どの学校でもやったことがあるような定番が多くて安定感がありますよね。

竹島◆　作家のラインナップもいいですね。評論も入試を意識した構成だと思いました。

三宅◆　内容的に安定していて、入試でよく出てくる人が入っています。評論家にはそれぞれの息づかいがあるから、その息づかいにあらかじめ慣れておくと、入試でもすっと入れるはずです。

オールマイティ、バランス抜群！『精選国語総合』（『精選』）

三宅◆　『精選』は、レベルの高い学校から中間層まで、幅広く安心して使ってもらえるオーソドックスな一冊本の教科書です。定番教材もしっかり位置づけ、同時に現代社会をしっかり見つめる、そのバランスが取れている。『分冊』は自分で順番を自由に選択できるよさがありますが、『精選』は、使いやすい順番に並んでいて、ご飯食べて、おかず食べて、お汁飲んで、というような、流れがよくできている。最終的に栄養のバランスも十分整えている。そういう作り方になっています。

現代を射ぬく確かな眼『分冊』『精選』の評論

――『分冊』『精選』ともに、入試頻出の評論家の文章を増補しました。

高草◆　「**空気を読む**」（香山リカ）は、すごくおもしろい教材です。

三宅◆　空気を読むのが当たり前だという雰囲気が若者の中にある。それでいいのかという問いかけです。実は教科書に載る前に、この文章の前半部分を国語表現でやったことがあります。これを読んで、「空気を読むということについてどう思うか」と問いかけたら、「空気を読むのはほどほどにすべきだ」と書いた生徒と、「空気を読むことの弊害もわかるが、やっぱり空気を読むべきだ」と書いた生徒と、きれいに半分に分かれたんです。他人事ではなく、まさに自分のテーマとして一所懸命書いてきて、驚きました。

竹島◆　生徒たちにとって、空気を読むというのは、すごく切実な問題なんですね。空気を読めない、読まない生徒が、浮いてしまったりします。

高草◆　「**『かわいい』現象**」（四方田犬彦）は、キティちゃんやポケモンなど身近な話題が出ていて、読みやすく生徒を引き付ける教材です。アニメのキャラクターの写真もたくさん出ていて素材が面白いのですが、文章もまとまっていて評論らしい評論です。

三宅◆　中身も日本文化論としてしっかりしています。授業の最初のうちは、おじさんが知らないことを生徒にどんどん言わせて、こちらは聞く。でも最後はそれを文化論にもっていく展開ができるでしょう。

名作と呼べる確かな文学を届けたい

三宅◆　『分冊』『精選』は、近現代文学の名作をぎっしり収録しています。時間的に授業で全部はできなくとも、これはぜひ読んでごらんと示すのもいいと思います。例えば、「**水かまきり**」

三宅義藏（みやけ　よしぞう）
千葉県立生浜高等学校教諭。大修館書店教科書編集委員。主に『国語総合 現代文編』および、『精選国語総合』の現代文編を担当。

「編集していてわくわくしました」
「名作の力はやはり大きい」

入試頻出の評論を網羅

大修館の「国語総合」３点の教材の筆者のうち、過去３年間に５校以上で出題された筆者と、その教材。
○数字…出題数　分冊…『国語総合 現代文編』
精選…『精選国語総合』
新編…『新編国語総合』

㊷鷲田清一「他者を理解するということ」分冊 精選
㊱姜尚中「何のために『働く』のか」新編
㉗内山節「自然と人間の関係をとおして考える」分冊 精選
㉖山崎正和「水の東西」分冊 精選 新編
⑱原研哉「白」分冊 精選
⑱福岡伸一「生きることと食べることの意味」分冊 新編
「『センス・オブ・ワンダー』を追いかけて」精選
⑩香山リカ「空気を読む」分冊 精選
⑧池上嘉彦「言葉についての新しい認識」分冊 精選
⑧高階秀爾「『美しさの発見』について」分冊
⑧四方田犬彦「『かわいい』現象」分冊
⑦竹田青嗣「いたずら――大人たちへの挑戦」分冊 新編
⑥吉田秀和「ヘンデルと力士」分冊
⑦港千尋「知識の扉――学ぶことの身体性」分冊
⑤柏木博「『しきり』の文化論」分冊

「古典と現代文が繋がっていくことが必要」

「自分が読んでも楽しい教科書」

竹島千春（たけしま　ちはる）
東京都立町田高等学校教諭。大修館教科書編集委員。主に『国語総合 古典編』の古文編を担当。

（川上弘美）を授業でやって、**「高瀬舟」**（森鷗外）は授業では扱えないけれども、「ぜひ読んで」と勧める。また、例えば、**「なめとこ山の熊」**（宮沢賢治）を短時間でさっと読んだ後、「最後に心に残るところを語ってごらん」と問いかけると、生徒ごとに実に多様な印象深い場面を語ります。名作の力はやはり大きい。名作がいっぱい載っている教科書は、いろいろな使い方ができる。

高草◆　**「セメント樽の中の手紙」**（葉山嘉樹）も、インパクトのある作品です。**「とんかつ」**（三浦哲郎）、**「夢十夜」**（夏目漱石）、**「鏡」**（村上春樹）なども、短時間で読んでも十分楽しめる。ゆっくり時間をかけてもいいし、一時間で読んでもいいという作品がたくさん載っています。

三宅◆　**「良識派」**（安部公房）はぜひ、授業をやってほしい。見開き2ページしかない短さなので、文章を読むのが苦手な生徒もそれほど困難なく入れる。ところが入っていくと相当深い。特に生徒に考えを発表させると、本当に意欲的に話します。

国語がもっと好きになる！

『新編国語総合』（『新編』）

――『新編』はいかがでしょうか。

高草◆　**「ワンダフル・プラネット！」**（野口聡一）の写真、すごくいいですよね。「ああ、地球ってこういうふうに見えるんだな」と驚きます。パタゴニアの氷河とか、マダガスカル島の川とか。東京の夜もバラが咲いたように見えるし。**「ペンギンはなぜ一列になって歩くのか？」**（佐藤克文）の写真もかわいいですよね。

三宅◆　『新編』は、勉強が苦手な生徒がすっと入れる工夫がいろいろなところにある。短めの教材が多く、バラエティーに富んでいますね。

高草◆　高校を出てすぐ社会に出る生徒も多いと思うので、**「社会に生きる」**という単元も設けました。

三宅◆　働くというテーマの教材は必ずやるという同僚がいます。**「何のために『働く』のか」**（姜尚中）は、まさに正面からこのテーマを取り上げて、なるほどと思わせる。**「漢字の性格」**（金田一春彦）も以前からありますがいい教材です。勉強嫌い、漢字が書けないという生徒がこれを読むと、「ああそうか」という顔になりますよ。

高草◆　重松清の**「バスに乗って」**は、小学生が主人公なので子どものころを思い出して、共感できることが多いと思うんです。起承転結がはっきりしていて扱いやすく、季節の移り変わりも描かれて、日本的な情緒を感じます。

三宅◆　子どもって、大人から見ればなんでもないことが、すごく怖かったり、気になったりするんですよね。バスの運転手にしても、ちょっと怖い存在に見えてしまう。そういう感覚が本当にうまく描かれている小説です。

――ベストセラー『生物と無生物のあいだ』の著者、福岡伸一さんの文章が「国語総合」三点すべてに入りました。

三宅◆　**「生きることと食べることの意味」**は、相当ショックだった。自分の体を構成する分子は常に入れ換わっていく。だから、「お変わりありませんね」ではなくて「お変わりありまくり」だなんて。「ええっ！」と驚きをもって読む生徒の姿が目に浮かびます。

高草真知子（たかくさ　まちこ）
麗澤大学・麗澤中学高等学校講師。大修館書店教科書編集委員。主に、『新編国語総合』現代文編を担当。

「これを読んで古典に親しみを感じてもらえたらいいですね」

「国語が好きになってくれるといいな」

――『精選』では福岡伸一の**「『センス・オブ・ワンダー』を追いかけて」**が巻頭随想になっています。

三宅◆　昔は夏休みに昆虫採集するのは定番でしたが、今はほとんどしなくなった。だから筆者と同じ体験はしていないかもしれないけれど、何か、ビビッと感じること、美しさに打たれたというような体験は、必ずあるはずです。高校生の感受性に働きかける教材だと思います。

古典にもっと親しめるように

――『新編』では、古文の入門教材**「ねずみの婿とり」**と、**「平家物語」「百人一首」**を、総ルビにしました。

竹島◆　実は、古文編をすべて総ルビにしようという話もあったんです。

三宅◆　それはしなかったんですか？

竹島◆　あまりにも易しい漢字にルビを振るのは、生徒が抵抗感を持つんじゃないか、また、紙面がごちゃごちゃしないかと考えて、入門のところと、特に音読を重視してほしい教材で部分的に試みました。今回の評価を受けて、今後どうするか考えたいですね。

――新指導要領の趣旨を受け、「親しみやすい古典」に力を入れました。

三宅◆　アンケート結果でいちばん嫌いな科目が数学とか物理を押しのけて、古典だといいます。「なぜ古典をやるのか」という生徒もいる。

竹島◆　『新編』の**「古典の魅力」**（野村萬斎）は、そういう疑問に答えられるような文章をと思って選びました。繰り返し読み、慣れ親しむのがいちばんだとか、古典に描かれた世界の深さだとか、自分を写す鏡だとかね。そういうことをぜひ、生徒に伝えたい。萬斎さんは知っている生徒も多いだろうし、世界の中で日本が誇る古典芸能を、広く伝えようと活動している方だから、説得力があります。

高草◆　いい教材を探されたなって思います。よく見つかりましたね。

竹島◆　新指導要領では**古典に関する近代以降の文章**を入れることになっています。収録する数や位置づけや内容については、すごく考え、悩んだところです。教材候補も一〇〇本近くにのぼりました。

髙草◆　とても苦労されたんですね。その成果があらわれています。例えば、「**春はあけぼの**」には、国語学者の山口仲美さんの現代語訳が付いています。「**なんてステキな光景なの！**」という鑑賞文もあって、清少納言が『源氏物語』の風景描写に影響を与えたなんて、初めて知る話でした。「**古典の窓**」というコラムも充実しましたね。これを読んで古典に親しみを感じてもらえたらいいですね。例えば、「**恋愛と結婚**」では、当時の婚姻制度がわかりやすく説明されています。

竹島◆　「**ことば遊び――なぞなぞ**」のように、身近な話題から、古典に親しんでくれたらいいなと思いました。

髙草◆　漢文では「**人面桃花**」がお勧めです。これは恋愛小説なんですよ。好きな男性のことを想って、もう恍惚として物も食べられなくなる女性が出てくる話なんですが、今年授業でやったら、「これ私のことです」って言ってすごく感情移入して読んだ女子生徒がいました。漢文をこんなに感情移入して読める人がいたんだって、うれしかったですね。読み終わった後、寸劇までやったんですよ。

竹島◆　『精選』の「**漢文のとびら**」にある「**勉強**」（一海知義）は、和漢異義語の話題です。「故人」や「迷惑」など、日本語と漢文における熟語の意外な意味の違いは、興味を引くでしょう。

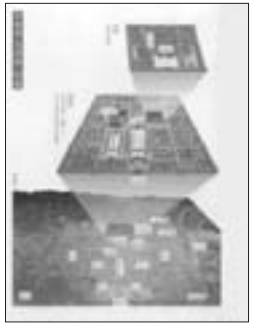
古典と現代文は繋がっている！

髙草◆　「**羅生門**」（芥川龍之介）では、「国語総合」三点とも、「参考」として典拠となった「今昔物語集」の原文が載りました。これまでも授業で印刷して配ることがありましたが、教科書に載っていると便利です。

竹島◆　そうですね。学年担任のときなどは「国語総合」の現代文と古典を同時に両方担当することがあります。そこで、指導時期を近くして、現代文で「羅生門」、古典で「今昔物語集」を扱い、違いを考えさせたりしています。

髙草◆　授業に奥行きが出ますね。

竹島◆　そうやって古典と現代文が繋がっていくことが必要だと思います。



「平安京・大内裏・内裏」図（『精選』『新編』）

今までにない古典巻末付録の工夫

――『精選』『新編』では巻末の古典に関する図版資料を充実させました。

髙草◆　「**平安京・大内裏・内裏**」図を立体的に三段に分けて示したのはすごいですね。全体像がぱっとつかめる。

三宅◆　国語便覧などにも、なかなかこういうアイデアはないですよね。

髙草◆　「羅生門」でも使えます。

竹島◆　「**古典の時間**」には、「一日」「一か月」「一年」という単位ごとに、わかりやすくビジュアルに説明してあります。年中行事を入れたのも、工夫したところです。

三宅◆　予算上、国語便覧の類いが買えない学校も増えています。このような充実した付録が教科書巻末に付いていると、すごくありがたいですね。

「言語活動の重視」と「表現の窓」

――指導要領では言語活動の重視がうたわれ、大修館の「国語総合」では「**表現の窓**」コーナーができました。

三宅◆　『分冊』『精選』では、末尾にまとめていますね。『新編』では単元ごとに教材と絡めて入っています。先生方が適宜、指導のねらいや流れを考えてアレンジして使っていただけるといいですね。例えば「**手紙を書こう**」は、漱石の実際の手紙「**学位を頂きたくないのであります**」を学習した後、それと絡めてやってもいい。

髙草◆　「視写」「聴写」「メモを取る」など、基礎になる要素がコンパクトに示してあって、ちょっとした時間に授業で扱えると思います。「**資料をもとに文章を書こう**」は、グラフを読み取って書く、資料をもとに文章をまとめるという活動です。PISA型のテストでも重視されている要素ですね。

竹島◆　実際には、「今日は表現の授業をやるぞ」という時間はあまりない。ですから、基本的で必要なことが、わかりやすく書かれていて、生徒が自分で読むだけでも勉強になる、というところがいいと思います。

届けたい大修館教科書の「思い」

――最後に一言ずつお願いします。

三宅◆　最初に、わくわくして編集したと述べましたが、『分冊』『精選』は、「これはぜひやりたい、ぜひ読ませたい」という教材が、思い通りに入った。ご覧になる先生方も、同じように感じていただけると思っています。

髙草◆　『新編』を使って、国語が好きになってくれるといいなと思います。特に、古典が嫌いな生徒には「この教科書なら絶対古典が好きになる」と言いたい。

竹島◆　読んで楽しい。元気が出る。興味を引く。そういう視点を大切にして、自分が読んでも楽しい教科書になるように編集しました。先生方も「これはいい教材だぞ」という気持ちを持ってくださるだろうし、生徒も楽しんでくれると思います。

髙草◆　古典の部分も、今までにない試みがたくさんあります。「古典と現代文は繋がっている」という思いが、エネルギーとして立ち上がっている感じがします。

――ありがとうございました。

（二〇一二年二月一七日　大修館書店会議室）

ワンダフル・プラネット！

野口聡一

のぐち　そういち　一九六五年―。宇宙飛行士。国際宇宙ステーションに一六三日滞在した。教材文は『ワンダフル・プラネット！』より。

国総314

1　自ら撮影した迫力ある写真

『ワンダフル・プラネット！』は、宇宙飛行士である野口聡一さんが、二〇〇九年一二月二一日から二〇一〇年六月一日までの約半年間、一六三日もの間国際宇宙ステーションで生活し、地球を何千周もした中で、あらためて見つけた地球の姿を記録、紹介した、写真を中心としたエッセイ集である。

授業では文章を読み進める前に、まず、これらの迫力ある写真に注目してほしい。今回の学習指導要領の改訂は「教育基本法」の改正にもとづいてなされたわけであるが、その際に「祖国愛」「郷土愛」をめぐってさまざまな論議があった。しかし、この写真を見ると、人類が最終的に行きつくところ、われわれのよってたつ所は、この地球をおいて他にないことを再認識させられるだろう。

平和・環境問題・共生・国際化など現代社会のかかえるさまざまな問題を解決するための基盤は、われわれ人類がこの「地球」という存在をどのようにとらえようとしているかにかかっている。豊かな未来を持つ生徒たちに、この写真とエッセイを通してそのことに気付いてほしいと考える。

2　「非連続型テキスト」に配慮

もともとツイッターという媒材により生まれたこのエッセイの特性である画像と文章のコラボレーション、発信者と受け手との交流、そうした反復が生み出した新しい文章の形態でもある。

そのため、文学的な薫り高いエッセイとは趣をやや異にするけれども、PISAテストや新しい指導要領でも重視されている「非連続型テキスト」との関連性も配慮して選定した。野口さんがこれらの画像を通して、なにを宇宙からメッセージとして発信しようとしたのか、私たち読み手はそこからなにが受けとれるのか、画像と文章を通して、そうした交流がなされることを目的として授業を展開してほしい。

3　人生の大きな「発見」へ

熟読玩味して味わうエッセイもそれはそれで国語科としては大切な存在であるけれども、ここでは、そうした学習活動ではなく、画像から何を受けとめられるか、また、その受けとったことがらが、どこまで大きな問題につながっているのか、拡散的な発想を養成すべく活用していただきたい。そして、画像からのささやかな「発見」が、やがては生徒たちの人生の大きな「発見」につながることを、学年の始まりにあたり、考えさせたいものである。

（石塚修）

メッセージ探しの旅

加賀美幸子

かがみ　さちこ　一九四〇年―。アナウンサー。エッセイや古典の朗読などでも活躍している。教材文は『こころを動かす言葉』より。

国総314

1　人生はメッセージ探しの旅

加賀美幸子著『こころを動かす言葉』（二〇〇〇年）に収められている一編である。その話の発端は最近はやりの花と香りを楽しむポプリから始まる。ヨーロッパのポプリを日本に紹介した熊井明子はポプリを『赤毛のアン』を読む中で知り、興味を持って調べだしたという。一方、同じように『赤毛のアン』のとりこになっていた加賀美であったが、『赤毛のアン』のどこにポプリが出てきたのか全く記憶になく、その代わりアンの朗読や言葉に強く惹かれたというのである。

「同じ時期に、同じ年齢で、同じように接したアンの中から、熊井さんはポプリを、私は朗読や言葉をメッセージとして受け止め、それがそのまま今に繋がっていることの人生の不思議さを、何十年もたってから思うのである。」と述べつつ、「人生はメッセージ探しの旅のような気がする。学校でも、先生は教室という同じ空間で、同じ言葉、同じ内容の授業をするのだが、生徒たちのメッセージの受け取り方は様々。何かを捉えたり、全く素通りしたり。」と敷衍する。ここにこのエッセーの題名ともした中核がある。

2　学びの姿勢をつくる

このエッセーの結びはこうである。「どんなことにもメッセージが存在すると思うことは、人生を前向きにさせてくれる。なぜなら、世の中のことすべて、事件や事故、貧困や病、戦いや死でさえ、『人間とは何か、どうすれば幸せに生きられるか』というメッセージを根源に忍ばせているからである。ましてや、ごくあたり前の日常の暮らしの中には、きりがないほどの生きるためのメッセージが溢れている。せっかく生まれてきたのだから、そのひとつひとつを、できる限り味わいたいものだ。」

ここでのメッセージの対象は広く暮らしの全てにわたっているが、これから学習していく教材からのメッセージだけでもこういう姿勢で受け取ってほしいものである。

3　読書への誘いにも

高校に入学してきて新たな気持ちで生きていこうとする生徒たちへの指針となるよう扱っていただけたらと思う。と同時に、『赤毛のアン』に代表される読書へのいざないとなればこれにしたことはない。

（鳴島　甫）

『赤毛のアン』の日本初訳

何のために「働く」のか

姜尚中

カン サン ジュン　一九五〇年―。政治学者。テレビのコメンテーターとしても活躍している。『悩む力』はベストセラーとなった。

国総314

1　素朴な問いに向き合う

「何のために働くのか」――この問いに対して、皆さんはどのように答えますか。お金のため、家族の生活を支えるためでしょうか。それとも、自分の生きがいだから、この仕事が好きだから、小さいころからの夢だったからでしょうか。あるいは、自分の力を生かして社会に貢献したいと思っているからでしょうか。

筆者の答えは、「他者からのアテンションを求めているから」というものです。「アテンション」とは、筆者によると「ねぎらいのまなざしを向けること」で、例えば「ご苦労さま」「ありがとう」等の声をかけることです。「アテンション」があるからこそ、人は社会の中で自分の存在を認められ、安心感や自信を得られる。やりがいや夢の実現などは、次の段階の話だというのです。さらに「お金は必要ですし、地位や名誉はいらないといったら嘘ですが、やはり他者からのアテンションが欲しいのです」と言いきっています。

確かに、厄介な仕事をしているときに「ありがとう。おかげで助かりました」などと言われると、心がほっと和みます。「アテンション」は、もらうのも嬉しいですが、あげるのも大事ですね。でも、仕事の意味って、それだけなのでしょうか。皆さんはどう思いますか。

2　進路に悩む生徒たちへ

この作品は、二〇〇八年のベストセラー『悩む力』の一節です。日ごろ勉強や部活、友人関係で頭がいっぱいの生徒たちが、社会に目を向け、職業や進路について考えるきっかけになればと思い、掲載しました。

姜尚中はテレビ等でおなじみの政治学者。やわらかい語り口とクールで知性的な風貌に、心ひかれる方も多いのではないでしょうか。

3　活発な議論へとつなぐ

本教材は三段落で構成され、それぞれに「金があったら働かないか」「『一人前になる』とは？」「他者からのアテンション」という見出しが付いています。その見出しに沿って筆者の考えをまとめた後で、四、五人のグループを作り、次のようなテーマで話し合ったらどうでしょう。

①もし宝くじで三億円が当たったら、仕事をやめて遊んで暮らすか。

②人はなぜ働くのか――筆者の意見に対して自分はどう考えるか。

③「他者からのアテンション」と「他者へのアテンション」――どんな具体例があるか。

活発な議論を期待します。

（髙草真知子）

ペンギンはなぜ一列になって歩くのか？

佐藤克文

さとう　かつふみ　一九六七年―。動物に小型計測器を取り付けて研究を行う。教材文は『ペンギンもクジラも秒速2メートルで泳ぐ』より。

国総314

1　ペンギンが行列をつくるわけ

佐藤克文著『ペンギンもクジラも秒速2メートルで泳ぐ』（二〇〇七年）中の第6章「ペンギンはなぜ一列になって歩くのか？」の「こぼれ話四：なぜ列になって歩く？」をもとに筆者に手を加えていただき教材化したものである。

ペンギンが一列になって歩いている姿はテレビの映像などでよく目にする。ペンギンなどの生態調査していた筆者も多くのペンギンを目にした。「（ペンギンが）広い氷原を歩く様子を見ていると、彼らはなぜか列をなして歩いている。その道しか歩けないわけではなく、平らな氷の上のどこでも歩ける状況にあっても、彼らは連なって歩いている。時には、千羽近いペンギンが、列を作っていることもある。そんな様子はとてもユーモラスで、私も最初は笑ってみていた。ところが、自分が実際に氷原を長距離歩くはめになったとき、何となく彼らの気持ちがわかってきた。」として話が始まるのである。

ペンギンの写真も教材の魅力

「なぜ一列になって歩くのか」の前に、「なぜ長距離歩く必要があるのか」の説明がなされ、そのうえで彼らの後を実際にたどってみることになる。

遠くからは平らに見えた氷原も、実際は凹凸が激しく割れ目もあちこちにあった。「そんな氷原を安全に歩くためにどうするかというと、前の者が歩いた後を忠実になぞっていくのだ。」ということになる。列になって歩く習性は、「過酷な環境でぎりぎりの生活を続けた結果」身に着いたのだというのである。

2　自然科学への導入として

自然科学に関わる文章のおもしろさは「なぜ」が解き明かされるところにある。この文章はその典型だといえる。しかもその解明は、単に外側からの観察によるものではなく、ペンギンと同じことを自分も行ってみるなかでなされているところに動物への温かいまなざしを感じさせてくれる。自然科学に関わる文章の導入としてのねらいをもたせた教材である。

3　説明の筋道をたどる

文章は平易であるが、繁殖地とえさ場（水開き）が遠く離れていることから説き起こし、一列になって歩く必要性を身をもっての体験を通して丁寧に説明しているので、その間の筋道を丁寧にたどっていってほしい。

（鳴島　甫）

バスに乗って

重松清

しげまつ　きよし　一九六三年―。小説家。二〇〇〇年に『ビタミンF』で直木賞受賞。主な作品に、「ナイフ」「カカシの夏休み」など。

国総314

1　小中教科書でも人気の作家

重松清の作品は、小・中学校の国語教科書でよく見かけるようになった。例えば光村図書出版の小学六年「国語」には「カレーライス」（書き下ろし）が掲載され、思春期を迎えた「ぼく」の眼を通して、彼と彼の父親とのすれ違いや通じ合いが甘辛く描かれている。子どもたちは「ぼく」の語りを読み取りながら参加者的に、つまり「ぼく」になりきってこれを読む。ついで、父親の視点を想像しながら再度この作品を読むように促される。それにより、一人称限定視点による語りの特徴を学ぶことになっている。

2　巧みな作品展開

「国語総合」で再度出会う重松作品は、短編集『小学五年生』所収の「バスに乗って」である。この作品では「少年」が主人公として第三者的に語られ、入院する母を見舞うために一人でバスに乗って病院に通う数か月間の出来事が描かれている。「少年」は「河野さん」という運転手に出会い、「路線バス」という公共の場での振る舞い方について幾たびもたしなめられる。母の入院という事態に加え、一人でバスに乗るスキーマを持たない「少年」にとって、「河野さん」は怖く近寄りたくない大人として認識される。しかし母の入院は長引き、バスの回数券は枚数を重ねていく。季節は冬に向かい、不安と切なさが階段を上がるように募っていく。サスペンス小説に用いられるstair caseの技法である。ただし重松作品は破局という部屋のドアを開けることなく、絶望的な局面で「河野さん」に予測不可能な対応をさせて「少年」を救わせる。

3　一気に全体を読ませる

作品に布置されたテーマは、「社会化するとは、どうなることか」である。このテーマは高校生にも敷衍できよう。長めの文章だが、構成も内容も分かりやすいので、一気に全体を読んで読後感を語り合う活動から始めたい。

その際、参加者的ではなくメタ的に読む姿勢をもたせることが重要である。メタ的に読むとは、「少年」や「河野さん」の人物形象がいかなる存在を象徴しているか、このような表現によって、我々はいかなるメッセージを受け取ることになるのかという意識をもって作品を読むことを言う。これを楽しく実現する一つの手段として、前述のstair caseの技法を生かし、対人評価がオセロのようにひっくり返る予測不可能な事件を組み込んだ物語の創作を促してみるとよい。生徒がそれぞれどんな「バス」に乗るか、楽しみになるだろう。

（藤森裕治）

「センス・オブ・ワンダー」を追いかけて

福岡伸一

ふくおか　しんいち　一九五九年―。分子生物学者。『生物と無生物のあいだ』でサントリー学芸賞受賞。優れたエッセイストとしても知られる。

国総313

1　神秘と不思議に目をみはる感覚

分子生物学者として活躍される福岡伸一氏の著作は『生物と無生物のあいだ』（二〇〇七年）のベストセラーを受けて中学高校の国語科教科書に多数掲載されている。

今回、教材として取り上げた文章には、筆者が昆虫少年だった時代に出会い、心奪われた「ルリボシカミキリの青さ」によって、生命の神秘と自然の美しさに気づいたこと、またそれが、科学者としての原点となったことが記されている。さらに、『沈黙の春』で環境問題を告発したレイチェル・カーソンの別の作品『センス・オブ・ワンダー』からの一節を取り上げ、上遠恵子氏の訳文とともに「神秘さや不思議さに目を見はる感性」すなわち「センス・オブ・ワンダー」が子どもたちの世界を「驚きと感激にみちあふれ」たものにすることを伝えている。

2　学びの原点を見つめ直す

高校に入学したばかりの生徒が「国語総合」の教科書と出会い、冒頭教材で本教材を読むことによって、子どもの頃に経験したであろう「驚きと感激」の感覚を思い出し、高等学校での学びの原点（あるいは好奇心）を考える契機となれば幸いである。

本教材は、理系離れや虫嫌いの生徒も増えている昨今の生徒たちに「自然の細部に宿る美しさ」を伝えることができる教材である。筆者がこだわってきた「ルリボシカミキリの青」のように、どのような表現を用いたら自らの感動を他者に伝えることができるか、本教材を機に考えさせたい。福岡氏の巧みな筆力が参考になるだろう。

3　自らの経験を文章に

福岡氏の最新作『動的平衡2――生命は自由になれるのか』（二〇一一年）では、遺伝子は周りの環境の影響によって発現が変化するというエピジェネティックスの考え方をふまえ、遺伝のあり方に対して新しい「生命の自由さ」を示している。そこからさらに、これまで近代科学や近代社会が世界を因果律的に捉えすぎた反省に基づき、今後の人間の判断基準について善悪や真偽から、美醜に変えた方がいいと述べている。本教材の結論部にも「美醜の感覚」がキーワードとして登場する。福岡氏の自由で奔放な発想力を授業で取り上げつつ、生徒自らの経験から得た「センス・オブ・ワンダー」を文章にまとめ他者に伝える経験をさせてみたい。

（奥村準子）

他者を理解するということ

鷲田清一

わしだ　きよかず　一九四九年―。哲学者。主な著書に『「聴く」ことの力』など。教材文は『わかりやすいはわかりにくい?』より。

国総3―

国総3―3

1　「理解」とはどういうことか

他者を理解するとは、他者と一つの考えを共有する、あるいは他者と同じ気持ちになることではなく、自分との差異を思い知らされつつ、それでも相手をもっと理解しようとしてその場に居つづけることであり、そこにはじめて、ほんとうのコミュニケーションが生まれるのではないか、と説く。

現代社会の多文化化の中、さまざまな場面や状況で、この他者理解ということが意味をもってくる。この文章は、タイトルにもあるように、まさにそのことを論ずる。

2　理解と表現と「考える力」

この文章は一見平易のようだが、「哲学する」心で、論じられることの一つ一つについて熟考・思索し、読み取ったことを自分の言葉で表現しようとしないと、言わんとすることが近づいてこないだろう。

論理的に筋道立てて考えることが苦手で、互いに議論を深めたりすることを、往々にして回避しようとする生徒たちに対して、まず、述べられていることについて考え、次に、考えたことをまとめ、さらに、それを交流して広げ、深め、豊かにする。「考える力」を中核にして、表現・理解する力を総合的に高めていくことが大切である。

3　思考の日常化　表現との一体化

今回、学習評価の観点が、従前の「思考・判断」「技術・表現」から「思考・判断・表現」「技術」として設定されることになった。今回の観点にある「表現」は、「思考・判断」したプロセスや結果をどのように表現しているか、思考と表現の一体化、あるいは、そういう「活用」としての「表現」力として評価する側面を強くもたせている。

情報を取り出すという読みの技術は身につけていても、全体の中身はわかっていない生徒が少なくないとよく言われている。全体と部分の関係づけ、情報の意味・価値づけをする能力が乏しいことも指摘されている。こうした実態を少しでも改善するためにも、文章を自分の既有経験に照らしながら、読み手・書き手の立場から論理の展開の相を意味づけ、考え・理解したことを自らの言葉で表現していく。高校の国語科の授業にあたり、ここに改めて、思考の日常化・習慣化、思考と表現の一体化を目指す指導の第一歩として、この教材を位置づけたい。

（金子守）

空気を読む

香山リカ

かやま　りか　一九六〇年―。精神科医。エッセイストやテレビのコメンテーターとしても活躍。教材文は『「悩み」の正体』（二〇〇七）より。

国総3―1

国総3―3

1　現代の若者の心に迫る

香山リカは、精神科医として現代人の心の問題に鋭く迫る活発な文筆活動で知られている。その筆鋒は精神医学の領域にとどまらず、現代社会、政治、文化など、幅広いジャンルの問題にも向けられる。

この教材は、筆者が接する学生たちの間に見られる「空気を読む」行動を取り上げて、現代の若者たちの心のあり方に迫った評論である。彼らが、現代社会で生き抜くために、「準パブリック」な場での評価を重視し、「少数派」になることをおそれ、「かのような人格（as-if personality）」を基本ルールとしていることを指摘して、現代人が目指すゴールとはいったい何なのかと問う。

2　生徒の身近な題材

右に述べた教材の概要からも分かるように、この文章に登場するのは、まさに教室にいる生徒たちにほかならない。今や、「空気を読む」ことを重んじる性向は、生徒の誰にとっても思い当たるところがあるはずだ。彼らは自分たちの日頃の行動が精神科医によって意味づけられていくプロセスを目の当たりにすることになる。そのことに興味をもたない生徒はいないだろう。生徒にとってこれ以上、関心をもちやすい題材はない（それが本当に望ましいことかどうかは別であるが）。この文章を読んで、自分たちの心のあり方を見つめ、大いに意見を述べ合ってもらいたい。

3　活発な言語活動へ

この文章を読んで批評する文章を書いたり、考えを述べ合ったりと、さまざまな言語活動が展開できるだろう。

「学習2」には、本文に述べられるような現代人の心のあり方について六〇〇字以内で文章を書くという活動が配置されている。こうした文章を書くために、まず生徒たちの意見を交流させるところから始めたい。学習指導要領が示すような、「反論を想定して発言したり疑問点を質問したり」する話し合いを実現したい。

また、実際に文章を書く際には、まず本文全体の要約文を書かせ、次に意見を書かせるという手順を採れば、基本的な「小論文」の学習になるだろう。出典を明示しながら引用したり、根拠を挙げて意見を述べたりすることを意識して取り組めば、論理的な思考・表現の学習として、より有効なものとなるだろう。ことばの学び手を育てる活発な言語活動の素材となることを期待したい。

（島田康行）

生きることと食べることの意味

福岡伸一

ふくおか　しんいち　一九五九年―。分子生物学者。『生物と無生物のあいだ』でサントリー学芸賞受賞。優れたエッセイストとしても知られる。

国総311

国総314

1　生命の本質を問う

私たちは毎日毎日、食べなければなりません。（略）もし、どうして食べ続けなければならないの？　と問われたら、あなたは何と答えるでしょう。生きるため？　では生きているとはいったい、どんな状態のことをいうのでしょうか。食べることの意味を問うためには、生きていることの意味を探る必要があります。

筆者福岡伸一氏が冒頭に持ち出した設問である。問いは大きいと思える。

筆者は、多くの人が生命と食べ物との関係を考えるとき、カロリー燃焼のことを考え、体内にある「自動車のエンジンのようなもの」に「ガソリンを注ぎ込むように食べ物をイメージするのに、疑義を呈する。そう考えると「実は、生命現象の非常に大事な側面を、見失ってしまうことにな」るという。

ここで筆者は、分子生物学的にこの問題を考察し、重大な働きをしたルドルフ・シェーンハイマーの業績をやさしく紹介する。「動物の体はミクロの部品が寄り集まってできた堅牢不変の構造（引用者注：先の「自動車のエンジン」の比喩に対応する）ではなく、食べた物と体の分子がたえず分解と合成をくりかえし、体はやがて新たに摂取した食べ物の分子とすっかり置き換わることを発見したのです。」これがその一応の結論。

そしてヘラクレイトスの「万物は流転する」のテーゼや『方丈記』の冒頭の「無常観」との共通性に言及し、その結論として福岡理論のキーワード「動的な平衡状態」にたどりつく。

2　第一級の書き手の文章

筆者は、専門アカデミズムでの仕事はもちろんのこととして、科学ジャーナリズムでも第一級の書き手であり、広く読まれている著書も多い。「生命とは何か」という問いは、高校生が日常であたりまえに考えるものではあるまい。なるべくやさしく語ろうとする啓蒙的な文章は、学習者の興味をひくだろう。

3　評論の論理展開を学ぶ

読解の基本的な問題点を［学習のポイント］等で用意してある。問題意識をもって文章を読ませるにはこれを活用してほしいが、教師と学習者のダイナミックなやりとりを実現できるなら、充実した授業になるだろう。文章は、模範的といってよいほどに整然とした論理構造をもっている。その論理展開の様相をたどることで、評論文の文章としての特性を会得することも目指してみたい授業目標である。

（門倉正二）

白

原研哉

はら　けんや　一九五八年―。グラフィックデザイナー。無印良品や愛知万博のプロモーションなどに関わる。教材文は『白』より。

国総3―1

国総3―3

1　文化である「白」

筆者の原研哉は、グラフィックデザイナーとしても活躍し、その立場からの物の見方考え方は、大いに興味を引く。

白について語ることは、「自分たちの文化の中にあるはずの感覚の資源を探り当てていく試み」だと、『白』の冒頭にある。「空白」にある想像力は、豊かな認識をもたらし、独創的創造につながる。

「白」は、「色の不在」を表現し、「色」を逃れて「間や余白のような時間性や空間性をはらむもの」でもあるのだから、白い紙と文字、長谷川等伯の松林図屏風、伊勢神宮、茶の湯、日本庭園などと、「白」へのアプローチは多彩なものとなった。

2「白」に結びつく論理を見極める

教科書本文は、『白』の冒頭の一部と「第四章　白へ」の一部とからなる。「推敲」という行為、「『本番』という時間」が「白」との関連で考察されることは、意外性がある。しかもそれは、日本文化の中にある美意識の原点に関わることなのである。「不可逆性」が生み出す美意識、それと同様の意味での「本番」の意識、これらにある論理を確認し、「推敲」や「本番」の内容を明らかにしていくことは、文化の見方にかかわり、学習者の思考力・判断力・表現力の育成に直結する。学習者の認識の深まり、美意識の発見を期待したい。

3　要約・詳述力の養成

文章の読み取りが恣意的にならないようにするには、叙述に即して筆者の考えを過不足なく捉えることが必要である。そのためには、「要約」「詳述」等の作業が有効である。教科書の本編の「学習1」は、特にこの点に留意して構成されている。書くことを通してこそ読む力がつく。

部分と全体との関係に留意し、論と例を区別し、対比・類似・同等の関係を明らかにし、どのような論理として構成されているかを確認することが必要である。そのためには、右に挙げた関係等を文面に図示する作業を介在させるのが有効である。傍点・傍線・括弧等で示す。

例えば、冒頭の二段落を一〇〇字以内に要約するには、右の作業後、「感覚の資源」「完成度」「不可逆な定着」というキーワードをもとに次のようにまとめる。

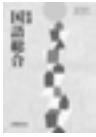
白について語ることは、文化の中の感覚の資源を探ることだ。白は、紙と印刷の文化において不可逆な定着が成立するゆえに完成度という意識に影響を与え、言葉をいかなる完成度で定着させるかという意識を生み出した。

（新見公康）

いたずら
――大人たちへの挑戦

竹田青嗣

たけだ　せいじ　一九四七年―。哲学者。主な著書に、『現代思想の冒険』『はじめての現象学』など。教材文は『愚か者の哲学』より。



国総313

国総314

1　いたずらの意味とは

「子どものいたずら」と聞いたら、半分大人である高校生は何を考えるだろうか。

いたずらは、子どもにとって、世界のはじめの探検です。子どもたちはいずれ、自分たちの社会を作りだしていくべき存在ですが、そのためには、与えられたルールを絶対化せず、むしろ「社会のルール」の軽重や内実、その意味を少しずつ試し、理解してゆくのでないといけない。子どもはいたずらという経験を通して、いつか大人たちに代わって自分たちなりのルールを形成してゆくその準備をしているのです。

筆者竹田青嗣氏は、子どもといたずらとの必然的なつながり、それを叱る親によって教えこまれる「ルールの束」としての自我の形成、さらに仲間どうしで行ういたずらの意味などを論じていき、この結論に至りつく。

「子どものいたずらはあたり前」とか、「いずれ大きくなればしなくなる」とか、いうぐらいの認識でいる者が多いが、筆者はそこで立ち止まって、「いたずらとはどんな意味をもつのか」という問いをたてる。その答えが先の結論である。

この文章の特色は、卑近な子どものいたずらが、意外に深い意味をもち、人間の社会化に大きな働きをしていることを指摘しているところにある。日常的事象の哲学的論究ということができる。

2　考えることの楽しさを

現代人は深くものを考えないとか、特に若い人たちは直感的な反応が強く思索に欠けるなどといわれる。「ものを考えるとはどういうことなのか」を知るためには、そのモデルになる思索に接してみるのがよい。自明だと思っていて考慮の余地はないようなものも、立ち止まって深く考えると、別な相貌でそのことが見えてくることがあるのを学ぶことは、高校生ぐらいの段階ではより多ければ多いほどよい。そのモデルがこの教材である。哲学的な思索は面倒でもあろうが、考えることの楽しさも教えてくれる。

3　論理的な思考力の育成

いたずらのもつ意味は筆者の考えるようなものだけではないだろう。他の意味があるなら、それはどんなものか。筆者の意見に反論はできないか、などなど論議を発展させていく。もちろん、この文章の腰を据えた読みとり作業は重要ではあるが、そのうえで、いたずらではなく他の身近な事柄に思索をむけて、常識だと思っていることに別の意味を付与していくことになれば、なおよい。（門倉正二）

政治の本質

橋爪大三郎

はしづめ　だいさぶろう　一九四八年―。社会学者。主な著書に『はじめての構造主義』など。教材文は『政治の教室』より。

国総314

1　若者の政治離れへの危機感

わが国の教育では、社会科以外では政治問題や宗教問題に関して、あえてふれないというのが、これまで一般的な考え方であったのではなかろうか。もちろん、教育がそうした問題において中立を保つことは重要であるけれども、余りに神経質になり、いたずらに大人の側が子どもたちにそうした話題を与えることを忌避しすぎてきたきらいはないだろうか。

若者の政治への無関心が選挙のたびにマスコミで報じられるが、そう仕向けてしまった責任は、もしかして大人の側の態度にこそあるのではないかと考える。

橋爪大三郎『政治の教室』は、若者たちの政治への無関心を脱するために、「民主主義についての正しい知識と理解を身につけ、一人一人が政治の主人公として行動するのをサポートする、待望の教科書」として書かれた。

民主主義についてならば、公民科でしっかりとあつかっているのだから、国語科でいまさらあつかわなくてもよかろうという声もあろう。しかし、もしほんとうにそうであるならば、日本の若者たちの政治意識はマスコミで批判されるほど低迷することはないはずである。

2　国語科で「政治」を考える

高校生生活のしめくくりに、社会に巣立ち、やがては民主主義を支えていく市民となっていく生徒たちに、国語科においてもあらためて政治に関するしっかりとした評論を読ませておくことは、きわめて重要であると考える。

今回、採録したのは「政治の教室」原理編の第1章「政治の本質」の冒頭で、政治の持つさまざまな問題の根底にある、そもそも政治とはという原点についてわかりやすく解説されている部分である。キーワードである「選択」は、個人のレベルでも社会生活を営むうえで大切な営為であり、けっして永田町の話にとどまるものではない。

3　「発見」のある文章を読む

誰かに決めてもらうのではなく、自らの決断で決めていくことの重要性を、われわれの「現実」認識と重ねて説明する視座は、政治にかぎらず、生徒たちの人生においてとても新鮮に映るはずだ。

国語科における「読むこと」の学習の最終目標を、生徒たちが自己の人生を豊かにするために何かを「読むこと」だとするならば、自分の生きていく社会を認識し直す、こうした発見のある文章を読みぬく学習こそが、高校におけるまとめとして求められることはいうまでもあるまい。

（石塚修）

水かまきり

川上弘美

かわかみ　ひろみ　一九五八年―。小説家。二〇〇七年より芥川賞選考委員。主な作品に、「神様」「センセイの鞄」「真鶴」など。

1　思春期の少女の思い

短編集『ハヅキさんのこと』（講談社二〇〇六年）の末尾に収録された作品である。他の作品が主に大人の淡い恋愛を描くのに対し、「水かまきり」は、思春期を迎える少女の、挫折した年上の幼なじみへの思慕を一人称で描いており、高校生にとっても身近な感覚で読むことができる。

2　優れた短編の表現を味わう

川上弘美は、さりげない会話や端的な風景描写によって、空白を活かしつつ場面の空気感を演出することが巧みである。「水かまきり」にも、それは冒頭から十分に活かされている。そのため、平易な表現に丁寧に着目し、場面と人物の関係を想像しながら読解することで、心境や情感、情景や季節感を捉える言語感覚を磨くのに最適な教材といえる。

「そんな端を歩くと危ないぞ。」

ケン坊がうしろから言った。川幅は、このあたりで少し広くなる。

慣れ親しんだ川岸を、後に続くケン坊にどこか甘えるように歩く春子の様子が、的確に表現される。後の「春子、危ないな、もっと端を歩け。」と呼応して、ぶっきらぼうな言葉で春子を気遣うケン坊の素朴な温かさも示される。

「ふわっと大きく笑った」昔のケン坊を知る春子は、プロ野球選手を自由契約となって「かすかに」しか笑わない今でも、その思慕は変わらない。それは、向こう岸近くまで石を飛ばすケン坊を「すごいね。」とほめる素直な言葉や、ケン坊のがらり戸を開ける音を「やさしく響いた」と受け止める微細な感覚に凝縮される。

選手生命として〈死〉に瀕したケン坊は、春子との散歩の途中で水かまきりを見つけ、春子と「生きてるなあ」「生きてるねえ」と素朴に声を上げることで再生へのかすかな糸口をつかみ始める。小動物の生命にケン坊の蠢動の予感を感じさせる結末は、巧みに自然を捉える志賀直哉の作風をどこか彷彿とさせ、やわらかい余韻を残す短編小説の魅力を十分に堪能することができる。

3　言葉を味わい言語感覚を磨く

何気ない点景に、人物の交流と自然との関わりが的確に表現される本教材では、一つ一つの平易な言葉が、実は作品世界全体に過不足なく結びつき有機的に立ち上がることに着目させたい。表現に対する生徒同士の気づきやイメージを共有させることで、言語感覚を磨くとともに、自身を取りまく人々や自然との関係に新たな眼を向ける契機ともなろう。

（髙橋龍夫）

古典の魅力

野村萬斎

のむら　まんさい　一九六六年―。狂言和泉流の狂言師。演劇やテレビドラマ、子供番組「にほんごであそば」にも出演するなど、幅広く活躍。

国総313

国総314

1　経験に裏打ちされた「古典の魅力」

狂言界の、というより古典芸能に携わる役者のトップランナーとして、映画・テレビ・演劇に出演している野村萬斎が、インタビューに答えて古典の魅力を語る。二〇〇八年、源氏物語千年に関する催しがあった時のものだが、それに止まらず、古典一般の魅力を親しみやすい口調で説いている。はじめの二段落「無理せずに目や耳で古典を楽しもう」「古典はあなたを映し出す鏡」は、どんな媒体でもよいから、まず古典に慣れ親しむこと、古典には説き尽くされない「余白」があり、自分の人生経験の中から新しい発見があることを説いている。一般的な見解に見えるが、実は、ここに狂言の役者として、幼い時からの修業の階梯が反映していることが面白いのである。三歳の初舞台、狂言〈靱猿〉の小猿の役では「キャアキャアキャア」という鳴き声しか発しない。四歳、言葉のある狂言〈いろは〉を演じるが、その稽古は、師匠の前に座って、師匠の云う通りを発声する。ほとんど意味が分からないセリフをまるごと覚えて演じる。勿論、台本は用いない。そういう彼が経てきた過程を考え合わせると、「目から耳から親しむ」、「幼いころ意味もわからずに演じていた」などという言葉が、彼の経験から出た言葉だったことが分かる。

第三段落「世界に誇るべき日本の古典芸能」は、萬斎のイギリス留学、度々の海外公演、シェイクスピア劇主演などの経験、また小劇場の芸術監督として前衛的な演劇にも携わるなど、彼の広い視野に基づく具体的な言葉が示される。

2　世界から見た日本の古典

萬斎は高校時代、特に古典が得意というわけではなかった、とは当時の担当教師の思い出話だが、そのような萬斎の経験に基づく言葉だからこそ、世界から見た日本の古典という観点も、現代の高校生にとって身近に感じられよう。

3　萬斎の出演作と合わせて

萬斎の映像、古くは、萬斎の出世作となった、黒澤明監督の映画「乱」、あるいはいまでも清明神社に映像が展示される映画「陰陽師」、テレビの朝ドラ「あぐり」、本職の狂言、そのような映像からまず入りたい。是非、狂言役者の幼い修業の様子も語っておきたい。そのことによって、彼の文章の「余白」も読み取れるはずなのである。

（田口和夫）

壇の浦の戦い
――『平家物語』を読む

永積安明

ながづみ　やすあき　一九〇八年―九五。国文学者。主な著書に、『軍記物語の世界』『徒然草を読む』など。教材文は、『平家物語を読む』より。

国総314

1　碩学の名講義を教科書で

平家物語など軍記物語の研究者であった永積安明氏が、NHKテレビ講座「平家物語の群像」の内容をもとにジュニア向けに書き下ろしたのが本書である。一九八〇年初版とやや古いが、長大な平家物語を、十人の代表的人物（忠盛、祇王・仏、俊寛、文覚、清盛、義仲、義経、忠度、知盛）の生き方の物語として見直すことで、物語の全体像をわかりやすく解説した格好の平家物語入門書である。

本文は、原文を五行～十行引用し、その現代語訳（逐語訳ではない）を付して物語の筋をたどりながら、その人物の生きざま（時には死にざま）を平家物語がどう描き、どのような人物像を形成しているかという観点から述べ進められている。ちょうど永積氏の授業を聞いているような構成になっており読みやすい。

2　物語の山場への深い洞察

教科書掲載部分はこの本の最終章、平知盛の一部である。永積氏はまず、一の谷の戦いで我が子知章を見捨てて知盛が船に逃げる場面（巻第九「知章最期」）を示し、人間の深い業（ごう）を背負った人物としての知盛に注目する。そしてその知盛ら平家一門の最期、壇の浦での平家滅亡の場面（巻第十一「能登殿最期」）が掲載部分である。

この箇所は古典教科書の定番教材であり、平家物語のクライマックスでもある。永積氏は、最後まで戦い続け敵までも道連れに入水する武者能登守教経（のとのかみ）と、「見るべきほどのことは見つ。」と言って敗北の運命を受け入れ自害する武将知盛との、ともに悲壮であるが対照的な最期を捉えた上で、こうした知盛の描き方に「盛者必衰」という、平家物語序章の思想がぴったり重なっており、あたかも知盛の最期のことばが物語全体の作者のことばであるかのような重要な意味合いがあると述べている。ともすれば、平家滅亡という出来事の確認で終わりかねない教材に、永積氏の古典の読み方の鋭さ深さを、生徒にもぜひ気づかせたい。

3　音読してリズムを味わう

また、永積氏もこの本の「あとがき」で勧めておられるが、原文部分だけをつなぎ合わせて音読し、独得の語りのリズムを実感することも重要である。さらに、永積氏の訳文に、教師が原文と対照させながら語を補っていくことで、ていねいな原文の読解に役立てることもできるだろう。

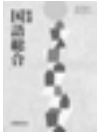
（大倉浩）

「和歌」という言葉の意味

大岡信

おおおか　まこと　一九三一年―。詩人、評論家。主な著書に、詩集『記憶と現在』、評論「ことばの力」など。本文は、『おもひ草』より。

国総312



国総313

1　「和する歌」としての和歌

著者大岡信氏の作品を教材として採録したものとしては、近時では『新編古典改訂版』の「百人一首の恋の歌」がある。単元「出会いと恋」の和歌教材として採録している。和歌に大岡氏の現代詩訳と鑑賞文を付して、読解ではなく鑑賞を主たる目的とする教材であった。

このたびの新教材は同じく和歌を扱いながらも、「和歌」が漢詩に対して「大和の歌」という意味をもつ以前に、「和する歌」という、より本質的な意味があったことを述べている。そうした問題が学習者の生活において、どのような意味を持つのかまでを見通そうとしている。

「和歌」の本質的な意味から説き起こして万葉集の額田王と大海人皇子との唱和を取り上げて「和歌」の具体例を示す。ここでは万葉集の「部立て」の意味から、作品の本来的な意味を明らかにしている。

さらには「和す」意味が変化しながらも本質は不変であることを、詩歌の歴史をたどることで示している。

2　古典世界と現代の繋がり

本教材は、学習指導要領の改訂に伴い、高等学校国語総合にも小中学校と同じく「伝統的な言語文化」に関する内容が盛り込まれたことによる採録である。指導要領の「内容の取り扱い」には「古典に関連する近代以降の文章を含めること」とあるのに相当する教材となる。

本教材が目指すのは、和歌を鑑賞することではない。教材の構成に従えば、和歌が本来持っていた意味が、時代と共に変遷する事実を知り、その上で、この教材で和歌の本質的な意味や用法を知った学習者が、自らの言語生活の中で「和す」ことの具体像を想起できることにある。

つまり、現代の生活が古典世界の出来事や事象に繋がっているという事実を知ることにある。

3　自らの生活に引きつけた学習活動

連綿と受け継がれている詩歌のあり方の本質を知ることによって、自らの生活における「和す」ことは何かを問うことが学習活動としてあらねばならない。「学習」として示した第2の活動は今回の指導要領改訂の趣旨に合致する活動である。これには各自の「コミュニケーション」のあり方を見直すための学習活動が有効だろう。古典の韻文を手がかりに「不易」な世界と「流行」のありようを知るような学習活動が本教材の本領を示すことになる。

（西一夫）

漢文のすすめ
――未来を考えるヒント

加藤徹

かとう　とおる　一九六三年―。中国文学者。『漢文力』がベストセラーになるなど、漢文の魅力を平易に伝え続けている。

国総314

1　なぜ漢文を学ぶのか

新学期を迎えると、多くの高等学校では一年生が初めて本格的な漢文と出会う。教師が最も大切にするのが「漢文との出会いの授業」であり、アイデアを駆使して生徒を漢文の世界に引き込むための努力を惜しまない。

この時期に生徒がきまって発するのが、「なぜ漢文を勉強するのか？」「漢文は現代では不要ではないか？」という疑問である。その回答は教師各自が用意しているはずだが、できれば教科書にも、この疑問に明確に答える、説得力に満ちた文章が載っていればというのが大方の本音であろう。

教科書の漢文入門編は、ほぼ例外なく訓読の意義を語る文章から始まる。しかし、残念ながらその筆致にはやや疑問がある。内容は別にして、惜しいかな、生徒に読ませる文章としては、親近感に欠けると言わざるを得ないからである。

加藤徹「漢文のすすめ―未来を考えるヒント」は、生徒にとって身近なインターネットの話題から始まる。

インターネットのウェブ・ページでは、ある語句をクリックすると、瞬時に関連する他のページへ飛ぶことができるが、私は、漢文の面白さの一つは、このリンク感覚にあると思っている。

著者は一九六三年生まれで今年四十九歳。『漢文力』『漢文の素養』などの著書によって、漢文の意義や面白さを語り続けている。本教材も、もと「トリップ感覚で生かす漢文古典の知恵」と題して発表された文章を再構成したもので、著者らしい斬新な漢文観・訓読観がよく現れている。特に「漢文の面白さの一つは、このリンク感覚にある」という指摘は、新鮮で示唆に富んでいる。

2　漢文をもっと身近に

漢文の授業開きの第一の目的は、漢文に興味を持たせ、漢文を嫌いにさせないことにある。この教材は、四ページという長さながら、具体例が豊富で読みやすく、押しつけがましさがない。中盤にある「堅苦しい老人のお説教ばかりが漢文だと思ったら、大間違いだ。」という一文も、漢文教師にとって嬉しいものである。

3　授業開きに最適

この教材を一時間かけてじっくり扱い、文章中に登場するインターネットや落語、昨今の世相などの話題に寄り道しながら、ゆったりと一時間を過ごしてはどうだろうか。漢文の授業開きに最適の教材として、自信を持ってお奨めする。

（塚田勝郎）

勉強 春眠暁を覚えず 桃いろいろ

一海知義

いっかい　ともよし　一九二九年―。中国文学者。主な著書に『一海知義の漢詩道場』など。本教材は『漢語の知識』より。

1　漢詩文への三つの鍵

古典は永遠の価値を持っているわけではなく、多様な解釈の可能性として存在しているのであり、読者のみずみずしい感性によって読まれることで始めて古典として輝くものである。古典のうちで特に漢文はその豊かなテキストの扉を開くまでに大変な努力が必要であるように思われている。しかし、漢詩文の教材は、

一、漢語の意味への視点

二、表現への視点

三、漢詩文の背後にある文化への視点

という三つの視点からアプローチすることで、意外に容易にその扉を開け、豊饒な世界に入ることができる。

2　三編の教材

一海知義氏「勉強」は、「勉強」「勉励」といった漢語の日本語の意味と漢文の意味との相違を取り上げ、漢語の意味に着目することの大切さを述べている。一語一語の意味を重視することは、漢文を学習する上で基本的なことがらであるが、授業では教科書の注釈で済ませてしまうなど、ともすると疎かにされることが多い。氏の指摘は貴重である。

孟浩然「春暁」は、「春眠暁を覚えず」の名句によって、わが国でも親しまれている作品である。同氏「春眠暁を覚えず」は、一語一語の意味に着目し、押韻や起承転結の展開を踏まえて、この詩を平易に解説している。奇を衒った視点は一切無く、基本的な手順をふんだ読解によって、春の朝の寝覚めの情景を生き生きと立ち上げ、私たちを漢詩の世界へいざなってくれる教材である。

中国で花と言えば、まず桃が思い浮かぶ。「成蹊」の故事や桃源郷の話を挙げるまでもなく、美味しい実がなり、生命力にあふれ、そしてはなやかな桃は中国の文化に深く根ざした花木である。一海氏「桃いろいろ」は、さまざまな作品に登場する桃の姿を点描し、漢文の表現の背後にある中国の文化や人々の感性を垣間見せてくれる。

3　古典を立ち上げる

漢文の教材からいたずらに教訓等を導くばかりではなく、まずは私たち教育に携わる者、そして生徒たち一人一人が、言葉を通して漢詩文の表現の世界そのものを生き生きと実感することが大切である。その感動が授業という場でも享受できたならば、古典学習はその役割を果たしたと言ってもよいであろう。本教科書に採用した三編の文章が、生き生きとした古典指導のために少しでも役立てば幸いである。

（加藤　敏）

（WEB国語教室・連動）

日々の授業を改善するために①

――一斉授業における発問と指名のポイント

石塚秀雄（いしづかひでお）
日本教育大学院大学特任教授

1　はじめに

先年、山陰地方のある県に高校国語研修会の講師として招かれた時のことである。何回かの研修会を経て、親しくなったある進学校の中堅教員が古典授業の悩みを訴えてきた。「古文の授業が面白くないのです。自分自身が全く興味を感じないものですから。」という。古文の授業が面白くないという生徒の声はよく聞くことではあるが、教師本人から面白くないと訴えられたのは初めてのことであったので、驚きもしたがその勇気に感動もした。

その先生の授業の様子を伺ってみると、どうやらどんな作品を扱おうと「ハイ読んで」「ハイ訳して」「ハイ文法的に説明すると」の三点で授業を行っているようである。もちろん授業形態は一斉授業である。いろいろと話し合った上で「それでは次回は私が授業をやってみましょう」ということになり、研修センター及び学校長の許可を得て私の「源氏物語」の授業公開となったのだが、詳細は今は省いておこう。

2　一斉授業のメリット・デメリット

この先生の言われる「面白くない授業」の原因のひとつに画一的な一斉授業という授業形態のあることは疑いがない。

ところが、講義型・グループ課題学習型・グループ発表型等多様な学習形態の中で、圧倒的なシェアを占めているのが一斉授業型の授業である。多分、多くの高校のほとんどの国語科の授業がこの形態をとっているに違いない。それというのも、この一斉授業形態には教師にとって実に有難いメリットがあるからである。

あからさまにそのメリットを挙げれば、何よりも教師が楽だからである。特に読解教材（現実には、国語科においてこの教材の占める割合は極めて高い）の場合、教師は生徒よりはるかに高い読解力を持っている。従って教師は自分のわかっていること、知っていることをそこまで達していない生徒に「教えこめば」授業は見事に成立するからである。一問一答式の一斉授業が蔓延するのは、教師が十分な準備をしないで教場に臨んでも、教材の中から生徒にはわかりづらい表現を見つけ出して「これはどういう意味か」とか「この部分は何を言っているのか」と発問して、教師の考えている正答に到達するまで生徒を指名し、答えさせていけば、まがりなりにも授業は成り立つからである。多忙を標榜する教師にとって、一問一答式の一斉授業はまことに便利な授業形態と言えよう。

もちろん、先生方の中には学識豊かで教育熱意のあふれる国語科教師も沢山おられる。そのような先生方がこの一斉授業を好まれるには別の理由がある。それはご自分の持つ知識を一刻も早く、しかも多量に生徒に伝達するには、（グループ学習のように）皆で話し合って、とか、家で調べてきて、というような悠長な授業はやっていられないというのである。これはいわゆる進学校と称する学校によく見られる傾向である。それがはなはだしくなると、もう生徒に答えさせる一問一答すらまどろっこしくなり、徹底的な教師中心の講義型授業となる。生徒は先生の言われることをひたすら拝聴し、理解できぬ点は自らが至らぬからと恥じて自学自習することになる。

かつて（旧制中学校の時代やその残映のあった昭和三〇年代）の高校にはこのような授業が存在した。筆者もO社のラジオ講座で毎週土曜の夜に受講した塩田良平氏（立教大教授）の講義などはその典型であった。（もっともラジオ講座では直接質問も回答もできないが。）

現在でも、T大学附属高校のK先生の授業などは大変なもので、参観に行った筆者も呆然として聞きほれてしまった。一時間で生徒に発問したのは二、三回。あとはK先生の「語り」に全員が酔ったのである。

このような授業が成立するには次の三点が満たされなくてはならない。

① 教師に圧倒的に深い学識があること。
② 教師が「語り」の技法を身に付けていること。
③ 生徒に一定の学力と意欲があること。

近年の高校現場には、これだけの条件の整ったところは少ない。多くの学校では、教師中心の講義型の授業を行えば、おそらく大多数の生徒が多様な形でのエスケープをすることは疑いないだろう。

講義型を頂点とする一斉授業には生徒がエスケープしたくなるようないくつものデメリットが存在するからである。

その第一は、何といっても生徒の主体的な活動の場がないことであろう。授業は全て教師の思うがままに行われる（発問にしても教師が重要・難解と考えた部分に集中する）ので、生徒が感じた疑問すら取り上げる場が出てこない。また、何のための授業なのか、発問なのかも終わってみなければ、生徒にはわからない。

第二に、教師の考えを生徒に押しつけがちになる点である。近年は少なくなったが、その作品（特に文学作品）の主題を教師の考えたひとつにしぼり、他は全て誤りとしてしまうような授業が少なくなかった。論説文における解釈とは異なり、特に文学作品では登場人物の心情理解などには十分な多様性を認める必要があるだろう。

第三に、きめ細かい評価を行わないと、生徒の理解度が把握できない点がある。これはグループ学習にも言えることだが、クラス全員の到達度をはかるには、授業開始

時にその時間の学習目標を明示し、終了時にそれをはかる評価を行うことが不可欠である。それなしに「わかりましたか」「何か質問はないですか」だけでは、生徒の実態は十分把握できない（十分工夫すれば、一斉授業こそ各生徒の理解度を最も的確に把握できる学習形態になり得るのだが）。しかし、それで終わってしまっている一斉授業がいかに多いことか。

3　一斉授業改善の要点

①発問を厳選すること

一斉授業の場合、生徒に問いかける質問の質が命である。数は少なくともよい、教室が皆で十分考える場となるような発問を定めることがまず必要となってくる。そのためには十二分な教材研究が不可欠なことは言うまでもない。ここでは、高校一年国語の授業の定番教材となっている「羅生門」（芥川龍之介）を例として考えていこう。

文学作品の場合、全体を読まずに形式段落に従って最初から読み説く手法もあるが、「羅生門」は短編であるので、まず全文を読み通そう。そして、この作品がいくつの場面から構成されているのかを考えさせてみるのである。

「この作品はいくつの場面から構成されていますか。」

これが第一時間目に行う唯一の発問である。もちろん、この発問に対する解答を決定していく段階では、「下人はどこにいたのか」とか、「羅生門はどんな有様であったのか」というような（質問的）対話が教師と生徒との間でなされることは当然であるが。

「羅生門」は定番教材となるだけあって、全体が主人公下人の居る場所とその心情とが緊密に組み合わされて構成されている。即ち下人の居る位置（羅生門の下→楼の上へ出るはしごの中段→楼の上）に対応して下人の心情（盗人になるか飢え死にするか）が見事に描かれている。従って段落も下人の位置に応じて三つに分けられようが、たった六行ではあるが下人の居なくなった最後の部分を独立させて四段落とするか、三段落に含めてしまうかは、最後の一文「下人の行方は、誰も知らない。」の扱い方にかかってこよう。

仮に三段落として扱うのなら、後の三時間または四時間は、下人の心情の把握と下人がなぜそういう心情になったのかを探らせる発問をすればよい。各時間とも二回の発問ですませることができる。そのかわり、生徒に十分考える時間と表現する（＝発言することや書くこと）時間が与えられることになる。時間に余裕があるからピンボケの答えが出た場合、なぜそれが誤りかを十分説明することが可能だろうし、場合によっては、他の生徒に説明させることもできるだろう。そうすれば、生徒は十分授業にのってくる。意欲的な授業参加は当然学力の向上となって表れてこよう。

一体、一問一答式の授業は、教師の趣味に応じて細かい部分まで聞きすぎる。この教材の指導目標が下人の心情理解にあるのなら、第一段落で「鴉」の存在が暗示することとか、「蟋蟀」の働きまで問うことはない。表現上の特色については、また別の教材で詳しく（それを指導目標に挙げて）行えばよいのである。

発問はできる限り少なくすること。それが一問一答型一斉授業の要諦である。

②指名は公平第一にすること

一問一答式の一斉授業を展開している時に「あの先生はできる生徒しかあてない」とか「特定の生徒だけを指名している」という評判が立ったら、もうその授業はおしまいである。あてられないと思っている生徒はもう絶対に授業にのってこないからである。

一問一答式の授業においては公平な指名が何よりも大切である。どの生徒もいつかは必ず指名されて答えねばならないと思っているからこそ予習にも授業にも熱が入るのである。発問数が多くないので、指名される生徒数もそう多くはない。従って誰を指名したかを教師の方できちんと記録しておく必要がある。教務手帖を活用する先生も少なくないだろうが、私が高校に勤務していた時は、各クラスの座席表を利用した。そのクラスの座席表をコピーしてもらって、そこに指名した印を付けるようにしたのである。これは生徒の座っている位置が明示されているので、教卓に置いておけばすぐチェックができ、まことに便利であった。チェックの時に、正答であったか誤答であったかまで印を変えて記録される先生もおられるようだが、私はそこまでしたことはない。

ところで「公平に」といっても、これにはある種の裏がある。いくら順番だからといって、全くわかっていそうもない生徒をあてるのは、本人のためにも気の毒である。発問や要求（例えば「音読しなさい」とか「この語の意味を今、辞書で確認してごらん」等、様々なレベルのものがあろう）に応じて適切な生徒を指名し、生徒に恥ずかしい思いをさせない心遣いをすることも教師には必要である。結果的に、二週間に一度は、全員が指名されていればいいのだから。もっとも、このことは多くの先生方が無意識にしろ、実践されていることかもしれないが。

4　おわりに

一斉授業は、教師が指導の目標をきちんと定め、それを生徒に明示した上で厳選した発問を行えば、その教材の要点を確実に教えこむことができるという利点がある。その時、生徒が受け身にならないよう様々な工夫や心遣いをすることが必要なのである。特に、学習意欲のあまり高くない生徒集団を指導する場合には、生徒同士の話し合いの場を作ることがどうしても必要となってくるだろう。

この連載では、国語教育に関し、実践的な面からさまざまな課題について説いていくが、今後グループ学習や、評価の在り方についても触れる予定でいる。

なお、今回の「羅生門」の授業展開例は学習指導案の形で「WEB国語教室」に掲載される予定である。ぜひ参照していただきたい。

今回の「授業改善へのアドバイス」

1　指導目標を明確に示すこと
2　発問を厳選すること
3　生徒の活動の場を作ること
4　指名は公平に行うこと
5　目標の達成度をはかる評価を行うこと

この連載は大修館HP内「WEB国語教室」でも読むことができます。次回は「WEB国語教室」に八月頃アップする予定です。

新人教師のための漢文指導入門講座①

「WEB国語教室」連動

漢文訓読の第一歩

―漢字の音訓にこだわる(1)

塚田勝郎（つかだかつろう）
筑波大学付属高等学校教諭

はじめに

今、漢文が注目されています。書店の店頭には『論語』に関する書籍が多く並び、ゲーム界では中国ものが人気を集めています。素読や音読、漢詩の創作などの話題もよく耳にするところです。小中学校では、学習指導要領の改訂に伴い、漢文に触れる機会が増えています。

一方、高等学校の現場ではどうでしょうか。世の中の動きとは裏腹に、多くの学校では主にセンター試験対策として漢文の授業が行われています。「センター頼みの漢文」と揶揄される所以です。この閉塞的な状況を打破するために、様々な提案がなされていますが、改善の兆しは見られません。その原因は、次のような構図で説明できそうです。

高等学校の新人国語教師をモデルに考えてみます。彼（彼女）の高等学校時代の漢文の授業は、ほとんどがセンター試験対策に充てられ、漢文の面白さを知らずに卒業してしまった。大学で教職課程を取ったものの、漢文関係の講義は最低限しか履修せず、ここでも漢文の魅力に気づかなかった。大学卒業後、念願かなって教壇に立つが、漢文の面白さを知らないし、教えるにも不安があるので、授業ではほとんど漢文を扱わない。教わる側も、センター試験で点数を取ることだけを目標にする。――このような負の連鎖が存在しているのではないでしょうか。このままでは、漢文教育の衰退は火を見るよりも明らかです。

そこで、高等学校の教壇に立って間もない新人の先生方や、国語教師を目指す学生諸君を対象に、漢文の面白さを発見し、漢文を教える確かな力をつけてほしいという気持ちから、この講座を開くこととなりました。タイトルは大げさですが、老漢文教師から若い世代への、教材研究や授業展開のコツの伝授として読んでいただければ幸いです。

漢字の音訓にこだわる

第一回は、漢字の音と訓にこだわってみましょう。「今さら漢字の音訓か」と思われるかもしれませんが、音訓のちがいを明確に意識できない高校生は案外多いのです。中には「耳で聞いて意味のわかるものが訓で、そうでないのが音」という誤った認識を頑固に持ち続けている生徒もあって、驚かされます。小中学校で間違って教えているのでは、という疑惑さえ浮かんできます。

次の問題は、本校の教育実習生に毎年課している実力判定テストの抜粋です。

問　次の各文字の読みから字音だけを選び、○で囲みなさい。

悪　あく　お　わるい　にくむ
一　いち　いつ　ひとつ
絵　え　かい
菊　きく
行　ぎょう　こう　あん　ゆく　おこなう
人　にん　じん　ひと
肉　にく　じく　しし
明　みょう　めい　みん　あかるい　あきらか
峠　とうげ
働　どう　はたらく

ここでは「字音」の語を用いていますが、高等学校の授業では「音読み」と言ったほうがわかりやすいかもしれません。ただし、「訓読み」の場合は、「訓」自体が「よみ」という意味ですから、「よみ」と「よみ」が重なり、重言になります。「字音・字訓」を避けるなら、「音・訓」と呼ぶのが無難でしょう。

念のため正解を欄外に示します。「峠」は字音がなく、「絵」と「菊」は字音しかないという、意地悪な設問であることにお気づきでしょう。したがって、よほどしっかりした知識がないと、大学生といえども満点は難しい問題です。特に「絵」の正答率が低いのが例年の傾向です。

高等学校の授業でも、漢文入門期にこのテストを使えそうです。答え合わせをしてみると、生徒たちは音訓の区別ができていないことに驚くにちがいありません。それをきっかけとして、次のように発問してみたらどうでしょうか。

【発問例】

○それぞれの文字の音訓の中で、初めて知ったものは何か。
○「絵」や「菊」は、なぜ訓がなく、音しかないのか。
○逆に、「峠」は、なぜ訓だけで、音がないのか。
○国字である「働」に音があるのはなぜか。
○「悪」の音「アク」「オ」の意味のちがいは。また、「アク」「オ」を含んだ熟語にはどのようなものがあるか。

正解　悪（アク・オ）　一（イチ・イツ）　絵（エ・カイ）　菊（キク）　行（キョウ・コウ・アン・ユク・オコナウ）　人（ニン・ジン）　肉（ニク・ジク）　明（ミョウ・メイ・ミン・アカルイ・アキラカ）　峠（なし）　働（ドウ）

○「行」や「明」などには音が多くあるが、それはなぜか。
○漢字の構成から意味や読みが類推できるものはどれか。
○そもそも漢字の音訓とは何か。

これらについて漢和辞典などで調べさせることは、入門の段階でタイムリーな試みでしょう。

漢文訓読の音訓に関するルール

漢文訓読では、音訓に関して次のルールがあります。

1　漢文の訓読では、原則として一字の語は字訓で、二字以上の熟語は字音で読む。固有名詞は、字数に限らず字音で読む。

2　字音は、原則として漢音を用いる。

《字音とは》 漢字の中国での発音を日本風にまねたものが字音で、筆者は、「コーヒー」や「パイナップル」のようなカタカナ英語に似ていると説明しています。中国では発音が時代や地域によって変化し、それを日本に受け入れた時期によって、呉音・漢音・唐宋音の区別ができました。加えて、日本独自の慣用音もできた結果、一つの漢字に複数の字音があるという状況が生じたのです。

《字訓とは》 漢字の意味に相当する日本語が、その漢字の読みとして定着したものが字訓です。したがって、日本にその物や観念がなければ、字訓は生まれません。「罪と罰」のような対照的な二字であっても、「つみとバツ」と字訓と字音で読むのは、言葉の風土と読みとの関係を示す好例でしょう。

では、訓読入門編に頻出の「蛇足」を例にみましょう。

蛇足

①楚有祠者。賜其舎人巵酒。
②舎人相謂曰、「数人飲之不足、
③一人飲之有余。請画地為蛇、
先成者飲酒。」一人蛇先成、
引酒且飲之。④乃左手持巵、右
手画蛇曰、「吾能為之足。」……。

（戦国策、斉）

楚に祠る者有り。其の舎人に巵酒を賜ふ。舎人相謂ひて曰はく、「数人之を飲まば足らず、一人之を飲まば余り有らん。請ふ地に画きて蛇を為り、先づ成る者酒を飲まん。」と。一人蛇先づ成り、酒を引き且に之を飲まんとす。乃ち左手もて巵を持し、右手もて蛇を画きて曰はく、

「吾能く之が足を為る。」と。……。

《一字の語は字訓で》 訓読では、一字の語は字訓で読みます。傍線部①「楚有祠者。」で、固有名詞の「楚」以外の「祠」「者」「有」を「まつる」「もの」「あり」と読むのがその例です。訓読とは、中国語で書かれた詩文を、日本文の構造に当てはめ、日本語として読んでいく方法ですから、訓読が字訓を基本とするのは当然と言えましょう。

しかし、「仁」「義」「礼」「智」「信」など精神や理念を表す語は、対応する和語がないために字音で読みます。

字訓で読むと実態が異なってしまう場合も、字音で読みます。たとえば「薇」「粟」「楓」「蓬」「柏」は、「ぜんまい」「あわ」「かえで」「よもぎ」「かしわ」と字訓で読むと、別のものになってしまいます。

微妙なのは「田」や「城」です。寓話「守株」の冒頭「宋人有耕田者。」（韓非子、五蠹）は、「ソウひとにたをたがやすものあり。」とも「デンをたがやす」とも読みますが、筆者は「田といっても田んぼではなく、畑である。」と説明した上で「た」と読んでいます。

また、杜甫の詩「春望」の一句「城春草木深」は、「しろはるにしてサウモクふかし」ではなく「ジヤウはるにして」でなければならないと主張する向きもありますが、筆者は「この『城』は長安の町のこと。日本の城郭とは異なる。」と補足して、「しろ」と読むように指導しています。

このあたりは見解が分かれるところでしょう。

《二字以上の熟語は字音で》 熟語を字音ではなく字訓で読む例外は、「所謂」「所以」「何如・如何」などの慣用語で、これらは熟字訓で読みます。しかし、これを拡大して傍線部②「舎人」③「一人」を「とねり」「ひとり」と読んだりするのは感心しません。なお、「楚人」「燕人」なども例外で、「国名＋ひと」と読むのが慣例です。

《字音は原則として漢音を選ぶ》 傍線部④「乃左手持巵、右手画蛇曰、……。」は、これまでに確認してきた原則に従って、「すなはちサシュもてシをもち、イウシュもてへびをゑがきていはく、……。」と訓読します。「右手」は「ウシュ」と読んでも間違いとは言えませんが、「右」は漢音が「ユウ」、呉音が「ウ」であるところから、漢音の「ユウ」に軍配が上がります。字音で迷ったら漢音で読むのが得策です。多くの漢和辞典が呉音より先に漢音を載せているのも、このためです。

音訓の読み分けは、一朝一夕には身につきません。不明な点は必ず漢和辞典で確認する習慣を持ちたいものです。

この連載は大修館HP内「WEB国語教室」でも読むことができます。次回は「WEB国語教室」に七月頃アップする予定です。

「WEB国語教室」連動

世界の「国語」教育事情：第1回 アメリカ

入部（いりべ） 明子（あきこ） つくば国際大学

世界の「国語」教育に目を向けることは、日本の「国語」教育について考えるうえで、大切な指針となり得ます。大学や社会へと巣立っていく世界の「高校生」たちは、どのような環境のもとで、何を学んでいるのでしょうか。リレー形式で連載していきます。第1回はアメリカです。

1 アメリカの教育改革

学力の全国的な底上げを目指し、二〇一〇年に全米共通学力基準（Common Core State Standards）が発表された。前ブッシュ政権下の落ちこぼれ防止法（No Child Left Behind Act）に続く、学力向上のための国家教育戦略である。全米共通学力基準が求めるのは、大学に入学する学力、大学で勉強するのに必要な学力、あるいは社会で十分に仕事をすることのできる学力であり、幼稚園から高等学校まで、カリキュラムの見直しを迫られている学校は多い。前ブッシュ政権が推し進めてきた国家教育戦略は、学力格差の是正であり、基盤となる学力の保障が中心で、特に小学校三年生までに読解力の基礎を備えるとする「リーディング・ファースト」は強力に実行されてきた。オバマ政権でも国がイニシアチブを取って、学力向上を目指すという点は変わらないが、保障する学力は大学進学や就職を保障するものでなければならないという点が大きく異なる。

2 アメリカの高等学校国語教育の動向

そのような状況下で求められる国語力とは、社会が求める国語力、即ち社会で「生きる力」である。社会に流通する文章には豊富な語彙が含まれており、他人に理解してもらうための文章は、根拠を踏まえた主張の明確なものでなければならない。また、多くの人の理解を得るためには、様々な情報を精査し、分析し、論理的に伝える必要がある。そのような国語力は、これまでのアメリカの国語科教育で涵養されてこなかったわけではないが、必要な力として国が明示することはなかった。日本の学習指導要領のような国の統一的な教育カリキュラムがないと言われてきたアメリカだが、全米共通学力基準はそれに匹敵する内容を持ち、今般の日本の学習指導要領が求める言語活動の充実に通ずるところが多い。

たとえば、アメリカの高等学校の国語科でも、文学作品を読み、分析するといった学習がこれまで主であったが、大学が求める国語力は論理的な文章を読み、分析し、自らも論理的な文章を書くことができる力であることから、今日では文学作品の読解の授業を減らし、論理的な文章の読解や作成を重視する学校も増えてきている。

3 読む力の育成：読書

アメリカは無類の読書大国と言われているが、各都市の図書館は日本の国会図書館を凌ぐ蔵書量と機能を備え、書籍の販売数も世界でトップである。このような読書人口を支えているのが小学校からの読書指導だが、学校における読書の主たる目的の一つは、語彙の獲得である。小学校から高等学校まで一貫して、学習者個々の語彙のレベルに合わせ読書をさせる中で、新たな語彙を獲得させている。

また、アメリカの高等学校の国語科の授業では、一年間で十冊ほどの本をそのまま教科書として使用している。教室の書棚には生徒の人数分の本が揃えてあり、日本の教科書のように、作品のある部分を抜粋した内容を学習の対象とすることはない。それは歌唱を学ぶ時、「サビ」の部分だけを練習することが意味をなさないのと同じ理屈である。高等学校の国語科の授業では、作品のプロット（構成）に着目し、作者の提言がどのくらい作品として成功していたかについて分析する。教科書として選ばれる本は文学が多いが、シェークスピアの作品などは古典文学として扱われ、現代語訳との対比が行われる。

4 話す力と聞く力の育成：ディベート

話す・聞く学習は、小学校では「二人」でtalk（テーマを決めて語り合う）し、中学校では「三人」以上でdiscuss（協調的に話し合う）し、高等学校ではdebate（ルールを決めて話し合う）し、大学ではargue（結論に達するまで話し合う）することができるようになることを目標としている。

ディベート：自分の主張を論理的に述べる

高等学校におけるディベートの学習では、形式化された学習にならないよう論題は吟味され、生徒の身近な問題から国内・国際的な課題へと広範囲にわたり、社会や生活に結び付いている。論題例としては、「成績優秀者に対する報償の賛否」「オバマ大統領の経済政策の賛否」「仏政府によるアラブ女性のスカーフ着用禁止の賛否」「テロリズムを一つの国家の意思として認めるか」等がある。また、指導者用のガイドブック（『High School Public Debate Program』、九一頁）があり、それを踏まえ系統立った指導が行われている。ディベートを通して、論理的な思考力や調査研究能力、プレゼンテーション能力はもちろんのこと、自己肯定感や対人関係能力も涵養される。

5 書く力の育成：パワー・ライティング

陪審員制度のあるアメリカでは、事実と意見の書き分けや、根拠を踏まえて主張する表現技術について小学校から丁寧な指導が行われる。その一つがパワー・ライティングと呼ばれる表現技術である。パワー・ライティングとは抽象度を徐々に低くしていく文章の書き方で、四段階のステップがある。

まずパワー1として主張をし、パワー2でその根拠を挙げ、パワー3で主張と根拠との関係を説明し、パワー4では客観的な裏付けについて述べる。この四つのパワーは、裁判審理の冒頭陳述（主張）、証拠調べ（根拠の列挙）、最終弁論（主張と根拠との説明）、評議（客観的な裏付けの検討）に即したものである。司法を支えるこのような論理的な思考力や論理的な表現力は、民主主義国家の一市民として必要不可欠な国語力であり、特に高等学校では、ディベートのための文章作成を通してその力が育成されることが多く、指導にボランティアとして弁護士など司法関係者があたることもある。

6 視覚的に表現する力の育成：電子黒板を用いたプレゼンテーション

今日、コンピュータは、学校と社会との乖離を防ぐために、「情報」という風を通す窓となっている。その窓を積極的に見せていこうと、アメリカの多くの高等学校の教室には、ネットにつながった電子黒板が従来の黒板を覆うように設置されている。

電子黒板を活用して、生徒は実社会や実生活の情報を組み込んだプレゼンテーションを行い、「話す、聞く、読む、書く」という言語活動に加えて

教育のデジタリゼーション：電子黒板（中央）の活用

「視覚的に表現する」力の育成が行われている。教師もまた、ネット上にある企業が提供する教材や、他の教師が提供する教材を自由に電子黒板にダウンロードして使用することができる。

また、デジタル教科書や教材を作成するためのアプリケーションソフトが米アップル社によって無料で配布されており、今後はデジタル教科書やデジタル教材が一気に増えていくものと思われる。視覚的に表現する力とともに、視覚的な表現を理解する力がより一層求められることになる。

7 最後に

今日、教育におけるキーワードは、教育のデジタリゼーションや教育のグローバリゼーションなど横文字の難しい言葉が多くなってきたが、このような教育界の動向を示す言葉も、もともとは社会の動向を示す言葉として出てきたものである。アメリカの高等学校国語科の目指す今日の課題は「社会とのつながり」である。二〇一五年までにアメリカでは全米共通学力基準をもとに、大学で学ぶことのできる学力、社会で仕事をすることができる学力を測るテストを施行する予定である。

この連載は大修館HP内「WEB国語教室」でも読むことができます。次回は「WEB国語教室」に八月頃アップする予定です。

追悼　馬渕和夫先生

田口和夫（たぐちかずお）
文教大学名誉教授

馬渕和夫先生が平成二十三年十一月二十四日逝去された。享年九十三歳、十月初め、ご自宅療養中にお目にかかり、ご病気の話も出たが、いつものようににこやかにお話しいただき、これならまだまだこれからもお元気でご指導いただけると思っていたので、残念でならない。先生には、昭和二十九年東京教育大学入学、説話部会（後の説話研究会）に所属して以来、公私ともにお世話になり、遂には仲人までお願いしたのだった。

クラス担任として登場された先生は美男子で姿勢が良く、いかにもスポーツマンという印象であった。宇和島海軍航空隊の若き教官、東京文理大では庭球部主将ということは後で知ったことである。

先生のご専門は二つあった。主としては日本韻学史、もう一つは今昔物語集を中心とする説話研究である。私は説話の系譜に連なる。先生のご論は「『今昔物語集』の欠文の研究」（国語国文、昭23・12）に始まる。昭和三十七年説話文学会発足の中心メンバーとなられ、以来、代表委員・委員として私たちを牽引して来られた。説話研究会の同人誌「説話」は昭和四十三年創刊だが、その中心も先生であった。研究者としてのお姿に直接触れることができたのは、毎月一度の説話研究会例会の場においてであった。一語一文への集中は常のことで、そこからしばしば新解・新見が現れるのであった。先生のそういう時間を共有することによって、私たちがいかに鍛えられたかは言うまでもないことである。

先生はいつも夏期には東寺・醍醐寺の宝蔵調査に従事されていた。驥尾に付して、私たちも調査させていただくことが恒例となっていた。調査してきた資料を、研究会で取り上げ読み解き、刊行できたのも、先生あってこそであった。先生の『今昔物語集文節索引』、日本古典文学全集（旧・新）『今昔物語集』、新日本古典文学大系『三宝絵　注好選』も説話研究に裨益すること大である。

大修館書店は昭和五十三年告示の新学習指導要領の段階から高校の国語教科書に参入しているのだが、先生はその古典担当で、私もその一員となった。先生は「国語教育は、言語教育を通して、日本人の「こころ」を獲得すること」（「古典教育の原点」国語教室、昭57・2）とお考えであり、狭い意味での文学教育はめざされなかった。大修館の教科書特に古典は、先生のそのような発想を原点としている。「日本人の心」は一貫して先生が追求されていたことであった。先生を追憶しながら、あらためてその原点を思うのである。

なお、先生の『古典の窓』（大修館書店、平8）は、説話・国語教育関係論文を収録している。

デジタルは国語教育をどう変えるか？

中村伊知哉（なかむらいちや）
慶應義塾大学教授／文部科学省 学校教育の情報化に関する懇談会委員／文部科学省 コミュニケーション教育推進会議委員／デジタル教科書教材協議会副会長

◆進む教育のデジタル化

二〇〇九年の政権交代後、教育の情報化が急速に動き始めた。二〇二〇年に一人一台の情報端末とデジタル教科書が使える環境を実現することを政府目標とし、文部科学省と総務省は共同で学校情報化の実証研究を推し進めている。

現場志向である。筆者も参加した文部科学省の懇談会が二〇一一年四月に策定した「教育の情報化ビジョン」は、デジタル教科書、情報端末、ネットワークなどの必要事項を示すとともに、校務の情報化や教員への支援に力を込めている。教育現場のメリットが重要というメッセージである。

◆デジタル化のメリット

情報化のメリットは共有されてきている。映像や音声を使った分かりやすい教材が授業を魅力的にしたり、コンピュータが反復学習に役立ったりする。ネットで先生や生徒が互いにつながり、教え合い、学び合う。どこに住んでいても、世界の、最新の情報にネットでアクセスできるうえ、教室を外部に開放し、保護者や地域の方々とも交流しながら授業を進めることもできる。

既に「授業の質が向上した」、「授業改善ができた」という評価となって現場から多数の報告が上がってきており、学力の向上をもたらすというデータが世界的にも共有されている。学習意欲の向上や生活態度の改善に寄与するという評価も多い。

国語の授業では、個人の端末に書き込んだ考えを電子黒板でみんなで比較したり、書き取りを書いては消すことを繰り返したりする場面で効果が高いという報告がなされている。日本と同様に手書きを重視する台湾では個人端末にペンで漢字を書き込む授業に力が込められている。

◆DiTTの活動

しかし、日本は動きが遅かった。アメリカ、イギリス、ポルトガル等が力強い足取りを見せている。韓国やシンガポールは二〇一三年にデジタル教科書の本格利用を予定し、日本の七～八年先を行く。

そこで筆者らが発起人となり二〇一〇年七月に設立した「デジタル教科書教材協議会（DiTT）」は、全ての小中学生がデジタル環境で勉強できるよう活動している。学校現場や生徒、保護者などの「利用者」、政府・自治体などの「官」、そしてDiTTなど「民」の三位一体で情報化を進めるスタンスだ。

二〇一一年三月にとりまとめた「DiTTビジョン」では、(1)一、〇〇〇万台の情報端末の整備、(2)全教科のデジタル教科書・教材の開発、(3)教室内無線LAN整備率一〇〇％の三点について、政府目標の二〇二〇年を五年前倒しし、二〇一五年までに達成する目標を掲げている。

これを基にDiTTは実証研究、普及啓発を進めている。二〇一一年七月には、全国の学校の先生たちとオープンなコミュニティ「TEC」も作り、情報交換を進めている。日本の先生たちはとても能力が高く熱心。その先生たちが主役となる新しい教育環境を早急に整えたい。

◆不安や懸念を超えて

一方、急激な変化に対する不安もある。学校現場は対応できるのか。忙しい先生の負荷を増すことにならないか。情報化の予算は大丈夫か。子どもたちの成長にとってデジタル機器に危険なことはないのか。画一的な教育、無味乾燥な教育がはびこるのではないか。紙の教科書と黒板と先生による授業に勝るものはないのではないか…。

現時点で、「全く心配はない」などということはできない。デジタル技術も、その上で使われる教科書や教材も、それを使った授業の手法も、開発途上だ。開発しながら、学校の現場で先生たちに試してもらいながら、生徒たちにも使ってもらいながら、よりよいものに進化させていく。

紙の教科書も、ノートや鉛筆などの文具も、先生の授業の手法も、長い年月と愛情をかけて、進化を遂げてきた。そこにデジタル技術が投入されて、学校の状況が変わっても、年月をかけ、愛情をかけて、教育や学習を進歩させていくことに変わりはない。

紙には紙のよさがある。鉛筆には鉛筆のよさがある。だが、デジタルにはデジタルにしかできないことがある。それを併せて使いながら、次の世代の教育を作る。日本は今、その入口に立つのかどうか、ということが問われている。

◆復興と教育情報化

さきの大震災で、被災地では六三万冊の教科書が流されてしまったという。教科書や教材をデジタル化し、ネットワーク化しておく必要性が改めて浮き彫りになった。被災地では学校が避難場所として使われている。町の安心・安全のよりどころとして、学校の大切さが再認識されている。学校の防災設計に加え、電力、放送・通信環境を総合的に確保する必要がある。日本の復興を図るうえで、学校と教育の情報化は大事な論点となる。復興と教育情報化。この二つの難問を同時に解いていく。その覚悟が国全体に求められている。

読んできた本、読んでほしい本 ①

東京都立松原高等学校
柏木（かしわぎ） 敦（あつし）

『解説字体辞典』（三省堂、一九八六）
江守賢治 著

本コーナーでは、毎回、全国のさまざまな先生方よりオススメの本をご紹介いただきます。

皆さんは普段、「つじ」という漢字をどう書いているだろうか。一点しんにょうで書く人、二点しんにょうで書く人、果たして、どちらが正しいのだろうか。

これに対して、一つの明快な答えを示しているのが、江守賢治著『解説字体辞典』（三省堂、一九八六）である。この本は「辞典」というよりは、豊富な図版を用いながら、字体の歴史を「解説」したものであるが、特に「康熙字典」が我が国にもたらした弊害、誤解の是正に力点が置かれている。著者によれば、永く伝統的に書かれてきた楷書ではしんにょうは一点であるのに、康熙字典では二点になっており、それにその後の漢和辞典が追随したのだという。

現在の漢和辞典では、「辻」は俗字とされ、「辻」が人名用漢字、表外漢字字体表に入って標準とされている。マイクロソフト社のOS「ウィンドウズ」では、一点しんにょうの「辻」を、基本的には、表示、印刷しなくなった。

私は常々、このような漢字の字体については、国語教員だけではなく、児童や生徒の氏名を日々取り扱っている全ての教員が関心を持たなければならないと思っており、『解説字体辞典』でその解説に納得させられるところが多々あった。しかし、この名著をしても絶版の憂き目を免れ得なかったということは残念である。志の高い出版社からの復刊を強く望む。

次に紹介する本は、私が授業でよく活用している、中村雄二郎著『述語集』（岩波書店、一九八四）である。こちらは絶版どころか版に版を重ね、続編『述語集Ⅱ』も出ているので、既に読まれた方も多いことであろう。小説には親しめても、論説文は苦手という生徒が多い中、論理的思考力を訓練する教材として、私はこの本、中でも「子供」を演習問題として扱うことが多い。このテーマでは、子供の「他者性」を生徒が理解できるかどうかが眼目となる。

ところがある日、諸星大二郎作「子供の遊び」を読んで驚いた。なんだ漫画かよ、と思われるかも知れないが、これほど見事に「目に見える」形で、子供の「他者性」を示した本は、他にはないだろう。『汝、神になれ　鬼になれ』（集英社、二〇〇四）等に収録されているので、興味を持たれた方は、是非一読あれ。

古典のとびら

「無理題」を探る

――『宇治拾遺物語』『増鏡』を例として

松岡 義晃（まつおか よしあき）
英数学館高等学校非常勤講師

はじめに

高校で古典の授業をしながら、結局私のできることはと考えると、センター試験や二次、私大受験を目指す生徒に、その入試問題が自力で解けるだけの力をつけてやれるかどうかであると気づく。受験の前まではそのように努めるが、いざ受験を終えると役目は当然のことながら終わる。しかし、私にはもう一つ仕事がある。

入試の当事者は、出題者を含めた大学側と受験生である。そして、ほとんどの場合、大学側が主導権を握り、受験生は弱い立場に置かれる。高校教師は受験の場では当事者ではない。しかし、弱い立場の受験生の代わりに、大学側に、その入試が公平に行われたかクレームをつけることができる。それが試験問題批判である。これは、受験生へのエールでもある。受験生が在学中に受けた授業内容を踏まえて、その受験生の実力を正当に、公平に測ることができる問題であるかどうかを教師は検証する義務があるということだ。高校教師の仕事は受験生が受験場に入るまでではない。終わった後も厳しく大学側をチェックしなければならないと私は考える。そのチェックの過程で生まれたのが、「無理題」という考え方である。

「無理題」の種になるもの

先年、『無理題』こそ「難題」という本を出した時、「無理題」とは何のことかという質問を度々受けた。簡単に言えば、大学入試の問題で、正解が二つ以上考えられる「無理な問題」ということになる。友人相手には、川端康成『雪国』の冒頭、「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった」を示し、「君はコッキョー派か、クニザカイ派か」と尋ねる。また、国語の教師仲間には、『土佐日記』の冒頭、「男もすなる日記といふものを、女もしてみむとてするなり」を示し、「君はニキ派か、ニッキ派か」と尋ねる。ほとんどの教師が「ニキ派だ」と答えるが、私はニッキ派である。

この「日記」の読み方について、以前、生徒の質問を受けて各社の教科書を調べたことがある。直前に書いてある表題の『土佐日記』も加えて整理すると次のようになった。

①表題に「とさにっき」、本文に「にき」と振る（二種）
②表題には振り仮名なし、本文に「にき」と振る（六種）
③表題にも本文にも振り仮名なし（二種）

私はその時②の教科書を使用していたが、生徒から「表題はどう読むのか」と問われ弱った。私は仕方なく、本文の振り仮名「にき」を消せと指示したが、果たして正しかったか。今でも、朗読CDなどで多く「にき」と読んでいるのを聞くと、少し心痛む。

もしこの「日記」の読みが大学入試で出題されたら、それを「無理題」というのだと説明するが、幸いまだその問題を見たことはない。しかし、読みの問題だけでも「本意」「内裏」など、解答のゆれる「無理題」が変わらず多く出題されている。そのたびに、わずかな得点であろうが受験生に不公平な採点がなされているのではと心配する。断っておくが、私は正解を一つにせよと主張しているわけではない。そんな力もない。両方正解にせよと主張しているにすぎない。

「無理題」例一

昔、大隅守（桜島忠信）が政治を行っている時、郡司がいいかげんであった。何度も不始末があったので、重く罰してやろうと思って、身体を押さえる役、笞（しもと）で打つ役などを用意して呼び出したところ、白髪の老人で、笞で打つわけにもいかない。大隅守は、何とかこれを許してやろうと思って「歌が詠めるか」と尋ねると、「たいしたことはありませんが、詠みましょう」というので、詠ませたところ、（以下本文）

程もなく、わななき声にて打ち出（いだ）す。
年を経て頭の雪はつもれどもしもと見るにぞ身は冷えにける

といひければ、いみじうあはれがりて、感じて許し

てけり。

人はいかにも情はあるべし。

（『宇治拾遺物語』巻九）

問題　傍線部を口語訳せよ。

某大学、二〇〇八年度の問題である。

この『宇治拾遺物語』巻九の原文は「歌詠みて罪を許さる事」という表題をもっており、それに従うと、主人公はこの歌を詠んで罪を許された老人ということになる。従って、この傍線部の解釈も「人間はぜひとも風流の心がありたいものだ」を正解とするのだろう。諸本、ほとんどこの口訳をしている。

ところがこの入試原文では、当然のことながら表題「歌詠みて罪を許さるる事」はなく、しかも「大隅守」を主語として文は始まっている。

さらに、この入試問題の原文と思われる『新編日本古典文学全集』はこう書く。

[口訳] 人間にはともかく温情はあるべきものだ。

[頭注] この摘発された郡司は、自分の不始末の理由を一貫して「老い」のせいにして、素直に非を認めようとはしない頑固というか老獪というか誠実さに欠ける狡猾な老人のように見える。しかし、為政の怠慢に、厳格なはずの忠信は、弱々しげな老体に同情して、無条件に彼を放免しようと決断する。歌徳説話ではあるが、本質的には温情話と見るべきもの。

この問題に対して出題者に質問したところ、正解は非公表とのことだったが、「以後は気をつける」と返事があった（詳しくは『「無理題」こそ「難題」』第二章例二を見てほしい）。

「無理題」例二

中務の宮の御むすめは、亀山上皇の妃であったが、山里にそのまま残し置かれ、さびしく心細い生活を送っておられた。そこに中将という男性が、家も近いのでやって来、いろいろ世話をやくのをお付きの女房たちは喜んでいた。七月ごろ、風が強く吹き、雷の鳴る恐ろしい夜、その中将が現れたので、人々は頼もしく思った。（以下本文）

おはします母屋とあたれる廂の高欄に（中将は）おしかかりて、香染めのなよよかなる狩衣に、薄色の指貫うちふくだめるけしきにて、しめじめと物語しつつ、いたう更け行くまで、つくづくとさぶらひ給へば、御簾の中にも心づかひして、はかなきいらへなど聞ゆ。

暁がたになりぬれば、御几帳ひき寄せて、御とのごもりぬるかたはらに、いとなれ顔にそひふす男あり。

（以下略）　（『増鏡』巻十一）

問題　傍線部「はかなきいらへなど聞ゆ」の主語は誰か。次の中から一つ選べ。

ア　中務の宮の御むすめ　　イ　中将

ウ　人々　　エ　侍　　オ　法皇

某大学、二〇一〇年度の問題である。

授業でこれを取り上げたところ、全員「ウ」と答えた。その根拠を挙げさせたところ、

①この場合、母屋の中にいたのは「ア　中務の宮の御むすめ」と「ウ　人々」であり、「聞ゆ」は「言ふ」の謙譲語で、敬語法からいって「ア」ではなく「ウ」である。

②また、場面から、外の「中将」と直接話をするのは「人々」の方が自然である。

と答えた。

ところが、この問題の解答を探ったところ、学術書・一般書・問題集すべて、正解を「ア」にしていると知った。そこで、送れる範囲で質問の手紙を出したところ、この入試問題の原文と思われる一般書の訳注者から誤りであったという連絡があり、また問題集の一社から、来年度版で正解を「ウ」と訂正するという返事があった。

当の大学はおそらく「ア」を正解にしたであろうと判断するが、「正解は公表しません」とだけ答える。受験生の多くは、その培った学力を使って解くならば「ウ」しかないと考えているだろうが、正解を知るよしもなく、きわめて不公平なまま終わってしまったはずである。

私が先に述べたのは、生徒の目線での「無理題」の指摘ということであった。しかし、弱い立場の生徒、また、一高校教師がいくら主張しても通用するはずがない。この問題の場合、遅ればせであるが、訳注者からの返事という確かな根拠を得たことをとてもうれしく思った。このことは、「無理題」における根拠ということを強く意識させてくれた。

おわりに

高校側から「無理題」を検討することは、常に大学側にクレームをつけることであり、大学側の拒否反応が強いということは本を出してよくわかった。しかし、受験生にとっては生涯を決めるかもしれない重大事である。若い国語教師の協力を得ながら、受験生にできるだけのエールを送ることができるようになることを今後も期待し、この稿を閉じる。

来てくれてありがとう

北原 保雄
筑波大学名誉教授　『明鏡国語辞典』編者

ある先生が講師として小学校で課外授業をしたら、そのお礼の手紙にほとんどの児童が、

・教えてくれてありがとう。

と書いていて変に感じたそうです。

私も過日、同じような経験をしました。孫の通う幼稚園で、祖父母を招待して歌の披露をするという催しがありました。その発表会の最後です。園児全員がステージに並んで、

・おじいちゃん、おばあちゃん、来てくれてありがとう。

と感謝の言葉を述べてくれたのです。可愛らしい声にじーんと来ましたが、その一方で何とも言えない違和感を覚えました。「教えてくれてありがとう。」と手紙に書かれた先生も同じように感じたのでしょう。

どこがおかしいのでしょうか。どういう言い方をすればいいのでしょうか。

・来てくださって、ありがとうございました。

これならまったく問題がありません。しかし、幼稚園児にこれだけ完璧な敬語を使わせるのは無理です。無理ではないかもしれませんが、園児の言葉としては丁寧になりすぎです。

日ごろ園児たちは、園長さんや先生方に対して、「ありがとう」だけで感謝の挨拶をしているのでしょう。うちの孫たちも、改まって整列させてプレゼントを渡す儀式をするようなときに「ありがとうございます。」と言わせることがありますが、日ごろは普通に「ありがとう」を使っています。「ありがとう」はすでに感動詞になっているのです（『明鏡国語辞典』）。

ですから、「ありがとうございます」を「ありがとう」と省略しても、それほどの違和感はありません。「来てくださって（くださり）」を「来てくれて（くれ）」と敬語抜きにしたところが変に感じられるのです。

・来てくれて、ありがとうございました。

・来てくださって、ありがとう。

この二つを比べてみると、敬語表現の不整合という点では共通していますが、後者の方が格段に自然で受け入れやすく感じられます。

「来てくれて」の主語は相手（聞き手）です。しかも、この場合、感謝する相手です。感謝する相手は高めるべき人です。事実、「おじいちゃん、おばあちゃん」と尊敬語を使って高めています。高めるべき人に来てもらったのですから、敬語を使うのが自然であり当然です。

高めるべき相手である先生に対して「教えてくれて」と書いたのも、まったく同様の理由で変です。「先生」と「くれて」が敬語として整合していません。

「くださって（くださり）」と言うべきところを「くれて（くれ）」と言うのは（「くれ」とはあまり言わないようですが）、言葉が長くて言いにくく、いかにも敬語を使ったような感じになるということがあるからでしょう。「おっしゃる」も同じですが、そんなところから、「くれて」という言い方が多くなっているような気がします。

もう少し他の例について考えてみましょう。

1. （セールスマンが客に）疑問な点がありましたら、電話をくれたらすぐに伺いますから。
2. （スポーツ選手が）みんなが応援してくれるから。
3. 先輩の山田さんが私に電話してくれて。

1は本動詞の例ですが、敬語表現の上ではまったく同じです。商売上高めた方がいい客に対してですから、「お電話をくださったら」と言うべきでしょう。

2は「応援してくれる」のが相手でないので特に相手を高める必要はありませんし、敬語抜きの「みんな」と整合していて表現としては問題ありません。一体にスポーツ選手の言葉は敬語抜きで粗野になる傾向があります。

3も「山田さん」との整合性からすれば「くださって」と言うべきかもしれませんが、「山田さん」は聞き手ではないので、「くれて」でいいと思います。

祖父母が孫たちに「来てくれてありがとう」と言うのはまったく変ではありません。孫たちが祖父母に対して「来てくれて」と言うのが変なのです。

投稿

教材研究

副詞遣いの魔術師、龍之介

杉本（すぎもと） 員博（かずひろ）
大阪府立箕面高等学校

波多野完治は、抽象体と具象体、簡約体と蔓延体の対立概念で文章を分析する。[1] 抽象体の文章は、事物を簡略化するので単純な構造になりやすく、短文になる。具体的、感覚的な文体は、事物をそのまま写そうとするので、色々に文章が分かれ、一文は長くなる。それゆえ、抽象体は簡約体に、具象体は蔓延体になり易い。勿論、小説は具象体である。そこでハードルが待ち構える。具象体かつ簡約体の文章である。波多野はこの名文例として鷗外の『高瀬舟』を挙げる。その冒頭第三段落までの十三文は平均四四・六字である。『羅生門』の冒頭第三段落までの十四文は、平均三〇・四字である。『羅生門』の文体はとても簡約である。しかし、短ければよいという訳ではない。この冒頭文だけでも『高瀬舟』は十九字から八二字、『羅生門』は五字から六二字まである。長短折り混ぜ、緩急をつけて書くのが名文の秘訣なのだろう。

問題は、簡約なのに、感覚的な迫力が充溢しているかどうかに懸かっている。その方法として波多野は全体を書いて部分を想像させる圧縮と部分を書いて全体を想像させる選択があると述べる。「或日の暮方の事である。一人の下人が、羅生門の下で雨やみを待つてゐた。廣い門の下には、この男の外に誰もゐない。」これだけで、読者は情景を浮かべる。勿論「全体を書いて部分を想像させ」ている。圧縮である。しかし、龍之介の真骨頂を表すのはその次の文である。「唯、所々丹塗の剥げた、大きな圓柱に、蟋蟀が一匹とまつてゐる」。全体スケールを描いた後、細部の一つを描くことによって、荒れ果てた羅生門の雰囲気をものの見事に醸しだしている。選択である。『羅生門』は圧縮と選択の妙技による具象体かつ簡約体の文章である。

また、波多野は具象的な文章の特徴として会話や比喩が多いことに加え、具体的名詞、形容詞、形容修飾語が多く、動詞も副詞を伴う場合が多いと論じる。『羅生門』での会話や比喩を述べる必要はないだろう。「唯、所々丹塗の剥げた、大きな圓柱に、蟋蟀が一匹とまつてゐる」を見てみよう。たった二六文字に、具体的名詞「丹塗・圓柱・蟋蟀」、形容詞「大きな」、形容修飾語「丹塗の剥げた」がある。動詞も副詞「唯」を伴なっている。情景が目に浮かぶ素晴らしい感覚的、具象的な文章の秘密がこの辺りにあるのだろう。

しかし、副詞は、一つ間違うと、ものの動きを示すどころか感情オーバーになる。特に、「非常に　とても　いっぱいなどの副詞は事物の様子を具体的に示さず、ただ感覚や感情の程度をあらわすだけであるから、こういう副詞を作家は極度に制限する」と、波多野は副詞遣いに注意を促す。『羅生門』では「非常に　とても　いっぱい」は一度も遣われていない。さすがである。副詞で三回以上遣われているものは、「殆」（三回）「もう」（四回）「勿論」（六回）「唯」（六回）である。短編なのに、同じ副詞が頻出していると言えよう。波多野も述べるように、副詞は遣い方を一つ間違えば命取りになる言葉である。何かあるのではなかろうか。

まず、少ない方の「殆」と「もう」とを見てみよう。A～Gは出てくる順である。しかも、Eの文はDの文に直接続く。「もう」と「殆」がバトンタッチするような形で遣われていると考えてよいであろう。

A　もう二三人はありさうなものである。（この文のみ、「さらに」の意、他のものは「すでに」の意）

B　夕冷えのする京都は、もう火桶が欲しい程の寒さである。

C　蟋蟀も、もうどこかへ行つてしまつた。

D　その手は、次の瞬間には、もう鼻を掩ふ事を忘れてゐた。

E　或る強い感情が、殆悉この男の嗅覚を奪つてしまつたからである。

F　それから、皺で、殆鼻と一つになつた唇を、何か物でも嚙んでゐるやうに

G　饑死などと云ふ事は、殆考へる事さへ出來ない程、意識の外に追ひ出されてゐた。

A・B・Cの「もう」は、事実を修飾しているので読者は疑問を挟む余地がない。その自然な流れのなかで、Dの、死臭漂う中で「鼻を掩ふ事を忘れ」るという、本来なら下人の不自然な行為を「もう」の一言によって、なんの疑念も抱かせずに読ませている。Dの「もう」を持ってくるために、A・B・Cの「もう」を忍び込ませたと考えてよいであろう。

そして、Dの不自然な行為を理論づけるのが、Dにすぐ続くEの文である。「嗅覚」という生理学用語を持ち出して、権威づけをしているのである。そこで遣われた「殆」は、科学的な判断のもとでなされた「殆」なのである。その上、今度は、科学的な権威づけをなされた「殆」を、Fの客観的な描写をひとつの踏み台にして、Gの文へ填め込んである。考えて見れば、生きるか死ぬか瀬戸際の下人が「饑死」を「意識の外に追ひ出」してしまうという、不自然で不可解な心理の動きが、科学的な権威づけを施してある「殆」という副詞一語で正当化され、自然な流れのうちに読者は読んでしまう。「もう」は行為、「殆」は心理、両方とも不自然なものをさも当然のように読ませる細工である。もしこれを理屈づけするなら、長い文章であれやこれやと並び立てなければいけないであろう。

もうひとつ副詞句であるが、同じような例をだしてみよう。

A この男の外に誰もゐない。
B この男の外にも、雨やみをする市女笠や揉烏帽子が、もう二三人はありさうなものである。
C それが、この男の外には誰もゐない。
D 暇を出されたのも、實はこの衰微の小さな餘波に外ならない。（「に」がなく名詞、あるいは副助詞に捉えられるが意味上は同じであろう）
E 盗人になるより外に仕方がない。

この「外に」は、下人が羅生門の下で盗人になるかどうか逡巡している場面に、畳み掛けるように矢継ぎ早に遣われている。勿論、前の例と同じように、Dの文までは客観的描写であって、疑問を挟む隙間もない。その勢いでEの下人の心理を書いてあるのである。「饑死」か「盗人」かの二者択一で書かれてあるが、それ以外の選択肢もあるはずである（少なくとも食料があると思われる田舎へ行くという選択肢があるはずだ）。なのに、あたかも「饑死」か「盗人」かの二者択一しかないように読者に思わせるのは、「外に」の効果によるものであろう。

では、六回もでている「勿論」を見てみよう。

A 鴉は、勿論、門の上にある死人の肉を、啄みに來るのである。
B ふだんなら、勿論、主人の家へ歸る可き筈である。
C 勿論、中には女も男もまじつてゐるらしい。
D 下人には、勿論、何故老婆が死人の髪の毛を抜くかわからなかつた。
E 勿論、下人は、さつき迄、自分が盗人になる氣でゐた事なぞは、とうに忘れてゐるのである。
F 勿論、右の手では、赤く頬に膿を持つた大きな面皰を氣にしながら、聞いてゐるのである。

これも同じである。A・B・Cまでは、客観描写で読者は疑問を挟む余地がない。Dは下人の心理であるが、読者も「勿論」とうなずくであろう。問題はE・Fである。「饑死」か「盗人」かの二者択一で選んだ「盗人」である。「忘れる」はずがない。それを「勿論」の一言で「忘れてゐるのである」。Fに至ってはこの文だけでは、どうして「勿論」なのか分からない。老婆の弁明を聞くという行為と「面皰」を気にする行為が繋がるのは、まったく不自然である。しかも、もしこの不自然な行為の説明をしたら小説がぶち壊されるであろう。「勿論」の一語で自然に繋げてしまった。言葉の魔法である。よく読めば、A・B・C・Dの「勿論」はない方がすっきりする文である。わざわざ書いたところがミソであろう。勿論、E、Fを射程に置いて書いたのだろう。

では、最後にこれも六回でている「唯」を見てみよう。

A 唯、所々丹塗の剥げた、大きな圓柱に、蟋蟀が一匹とまつてゐる。
B 唯、所々、崩れかゝつた、さうしてその崩れ目に長い草のはへた石段の上に、鴉の糞が、點々と白くこびりついてゐるのが見える。
C 唯、おぼろげながら知れるのは、その中に裸の屍骸と、着物を着た屍骸とがあると云ふ事である。

D 後に殘つたのは、唯、或仕事をして、それが圓滿に成就した時の、安らかな得意と滿足とがあるばかりである。
E 唯、今時分、この門の上で、何をして居たのだか、それを己に話しさへすればいゝのだ。
F 外には、唯、黑洞々たる夜があるばかりである。

副詞の「唯」は、「①そのことだけをするさま。もっぱら。ひたすら。②取り立ててほかに何もないさま。③数量・程度などがきわめて少ないさま。たった。」（明鏡国語辞典）の三通りがあるが、全部②の「取り立ててほかに何もないさま」であろう。この「唯」は限定の副助詞を伴う場合がある。DとFの「ばかり」がそうである。この「ばかり」がどのように遣われているかも見てみよう。

A 饑死をするばかりである。
B 犬のやうに棄てられてしまふばかりである。
C どうせ死人ばかりである。
D 死人ばかりだと高を括つてゐた。
E 骨と皮ばかりの腕である。
F 後に殘つたのは、唯、或仕事をして、それが圓滿に成就した時の、安らかな得意と滿足とがあるばかりである。
G 皆、その位な事を、されてもいゝ人間ばかりだぞよ。
H 蛇を四寸ばかりづつに切つて
I 迷はなかつたばかりではない
J 僅に五歩を數へるばかりである。
K 唯、黑洞々たる夜があるばかりである。

十一ケ所も遣われている。「ばかり」には「①おおよその程度を表す。②範囲を限定する意を表す。③物事がすぐにも起こりそうな段階や程度のはなはだしい意を示す。」（明鏡国語辞典）などの意があるが、Hだけが①の程度を示し、他のものは②の限定を示していると捉えてよいであろう。Hは「老婆」の会話中のものであり、「ばかり」は限定の意味で読者の中に刷り込まれて、最後のKに来ていると考えてよい。

これに先ほどの「唯」を合わせて考えてみよう。一方で「唯」、「唯」……、他方で「ばかり」、「ばかり」……を刷り込ませ、最後のKの「唯、黑洞々たる夜があるばかりである」に来ているのである。ただし、途中、Fで、一回「唯～ばかり」の構文を遣っている。しかし、「唯」から「ばかり」まで長いのではっきりと読者には浮かび上がってこない。巧妙に、鼻につかない程度に、「唯～ばかり」の構文を刷り込んでいるのである。その上、その前に「僅に～ばかり」と同じような意を枕に置いて、最後の最後、読者の目に焼きつけるように「唯～ばかり」の構文を遣って、「黑洞々たる夜」を浮かび上がらせているのである。

『羅生門』が会話や比喩、具体的名詞や形容詞・形容修飾語の絢爛さにもかかわらず、簡約体の名文であるのは、「圧縮と選択」に依る。そのことは誰の目にも明白であろう。しかし、その裏で龍之介が副詞をあたかも魔術師のように巧みに操っていることに今まで誰も気づいていないのではなかろうか。

（1）波多野完治『全集2 文章診断学』小学館
尚、『羅生門』の引用は岩波全集第一巻（九七）による。

投稿
授業実践

学習者の未来と『方丈記』
――「ゆく河の流れ」の指導方法

中井賢一（なかい けんいち）
宇部工業高等専門学校

はじめに

私の勤務校のように、カリキュラム上の問題もあり、『方丈記』は、冒頭「ゆく河の流れ」の一節しか扱えないという高等学校も多くあろう。この時、私たち指導者は、「ゆく河の流れ」を通して、学習者に何を伝えるべきなのか。

例えば、本校で使用している三省堂教科書の指導書は、「冒頭文は『方丈記』全体を貫く主題である無常ということについて、対句表現を多用した流麗な文章で表現され」ている、とし、「目標」のひとつに「時代背景や無常観について理解する。」ということを挙げる。大修館書店を始め、他教科書会社の指導書も、「ゆく河の流れ」の一節を「主題＝無常」の象徴的言辞と捉え、「無常」の理解を授業の柱のひとつに据えている点では、ほぼ同様である。

ただ、『方丈記』全編を通読した上で、「主題＝無常」と授業をまとめるのなら、分からなくもないのであるが、この一節のみで、そのように指導して良いのか、私には疑問が残る。また、「無常」とは、読んで字の如く、「常なるものは無い」ということ、即ち、「全てのものは変化して止まない」ということだろう。別の言い方をするなら、「今あるものはいずれ全て無くなる」ということでもある。未来の空虚感を連想させさえする思想に授業を収束させることも、私には落ち着かない。

そこで、本稿においては、「ゆく河の流れ」の「表現」と「主題」との関係について考察した上で、この一節をどのように扱うべきか、具体的な授業展開の方法と併せ提案を試みる。

一　「ゆく河の流れ」の「表現」と「主題」

通常、「ゆく河の流れ」は、第一学年から、遅くとも第二学年前半で取り上げられることが多い。導入期、あるいはその直後の教材・学習材として使用されることになる。この「導入期」に指導すべき文法事項として「係り結び」がある。特徴的なこの規則は、学習者に強く印象付けられるようである。「ゆく河の流れ」においても、係助詞「ぞ」「か」が用いられており、「係り結び」について触れることになるが、指導者としては、この「規則」と訳出方法を解説するだけでは不十分だろう。そもそも、「ぞ」や「か」の「係り結び」とは、倒置を利用した〈強調〉表現である。[1] 倒置することによって、その一文を他の文脈から際立たせているわけだ。つまり、「ぞ」「か」の「係り結び」は、「ゆく河の流れ」における、筆者の「際立たせ」たい記述、筆者の〈強調〉したい記述を示す徴表でもある。ではなぜ、筆者はそこを〈強調〉したいのか。そこが、筆者の言いたい思想の中心、即ち「主題」[2]と深く関わっているからだということは容易に推察されよう。

そうあってみれば、自ずと注目されねばならない箇所が浮上する。後に本文を引用するが、「知らず、…。」及び、「また知らず、…。」の箇所である。

この箇所について、岩波『新大系』は、「漢文訓読調の倒置法」と指摘している。前に触れた三省堂の指導書もこれを受け「漢文訓読調の倒置法。事情や理由が理解できないということを強調している」とまとめている。他にも、岩波『旧大系』、小学館『旧全集』、新潮『集成』、朝日『全書』などが明らかに「倒置」と解釈しており、ここを「『倒置』を利用した〈強調〉」と見ているようだ。一方、原田種成氏は、「『知らず』は、（中略）疑問の気持を強調する働きを持つ、強めの修辞で、句末を疑問詞で結ぶ一種の発語」と見て、「倒置」ではないとされる。[3] しかし、私は、「倒置」と見るにせよ、「発語」と見るにせよ、その「表現」意図が〈強調〉にある、ということのほうが授業においては重要であると思う。「漢文訓読調」のこの箇所が、二度〈強調〉されているということが重要なのだ。

このように考えた時、「知らず、…。」「また知らず、…。」には、前に触れた、「係り結び」という、「『倒置』を利用した〈強調〉」までもが、三箇所含まれていることに気付く。筆者は、実に計五回も〈強調〉を繰り返しているのだ。

今、三省堂「高等学校古典古文編［改訂版］」に拠り本文を引用してみる。本稿で問題にしている〈強調〉の「表現」には、傍線等を付し、また、私に現代語訳を施した。

知らず、生まれ死ぬる人、いづ方より来たりて、いづ方へか去る。
また知らず、仮の宿り、たがために か心を悩まし、何によりてか目を喜ばしむる。
いったい生まれ死んでいく人間は、どこから来てどこに去っていくのか。（私には分からない。）
また、いったいはかないこの世の一時的な住居[4]は、誰のために苦心して建築し、どんな理由で綺麗にして目を楽しませるのか。（私には分からない。）

〈強調〉の「表現」が多用されているさまが一目瞭然である。それは、ここが、「主題」だからではないのか。筆者は、この一節を通じて、「人」が生き死ぬことについての「疑問」を、また、「住居」が苦心して建築されることについての「疑問」を、強く「表現」しているのである。

二　授業の展開

A「人」が生き死ぬことについての「疑問」（＝「人」はどこから来てどこに去っていくのか）

B「住居」が苦心して建築されることについての「疑問」（＝「住居」は誰のために苦心して建築し、なぜ綺麗に仕立てられるのか）

便宜上、二つに分けて示したが、「ゆく河の流れ」の「主題」を、このように「主題A」「主題B」とまとめ直すことで、新たな

授業の「目標」と具体的展開が見えてくる。

私の現勤務校は、工業高等専門学校であり、将来、ものづくり現場のリーダーとなる者も存在する。専門的知識の向上は無論のこと、より良い製品や技能を創造し、未来に引き継ぐ使命感の向上も望まれる。国語科の指導者としては、授業を通して、他者の「表現」から的確に「主題」を理解する能力や、自身の見解を正しく伝える能力の育成を目指すとともに、その「使命感の向上」も図りたい。

そこで、私は、特に「主題B」に注目させた。建築を志す者には無論、様々な分野のものづくりを志す本校の学習者にとっては、「主題B」に見られる「住居」建築に対する「疑問」は、いわば根本的なアンチテーゼでもある。「いずれ亡くなる人間の、いずれ無くなる一時的な住居（＝もの）を、いったい誰のために苦心して建築し、また、なぜ綺麗に仕立てなければならないのか」という筆者の「疑問」に、学習者を真摯に向き合わせたい。そして、その中で、「人も住居もいずれ消える。しかし、だからこそ、限られた時間や空間の質を高める工夫が『住居』になされるべきだ。その工夫がより良いものとなって未来に引き継がれていくべきだ。」との、「人」のより良い未来のための努力を肯定する思考へと収斂するような授業を目標としたい。言い換えるなら、筆者が、《人も住居（＝もの）もいずれ消える》―ゆえに―《「主題B」》、との結論を導いたことに対し、学習者が、《人も住居（＝もの）もいずれ消える》―しかし―《反「主題B」》、と結論を導けるような授業である。そのためにも、筆者の思想を自分の現実に引き付け、その上で、より良い未来のために筆者に反論する、といった思考手順を踏ませることが重要であろうし、そのことが、ものづくりに対する前向きな意欲にもつながろう。

このような考えの下、「主題B」の解説の後、その「アンチテーゼ」性を説明した上で、「鑑賞文」を書かせた。「鑑賞文」を書くためには、まず改めて自分で現代語訳を考えねばならず、必然的に、この「アンチテーゼ」に個々の学習者が向き合わねばならない。また、強烈な「アンチテーゼ」だからこそ、それに反論するためには、自身の存在意義や「使命感」に深く思いを致さねばならない。完成した「鑑賞文」は、回覧、相互評価させつつ、他者の見解にも多く触れさせ、視点の多角化を図った。具体的な指導は、二年生全学科、前期の三単位時間（五〇分×三コマ）を配当し、次の通り行った。

【第一時】通読・冒頭文暗唱・文法事項解説・対訳作成（冒頭～「ただ水の泡にぞ似たりける」）

本時においては、音読を重視し、和漢混淆文の特徴に触れた上で、文法事項の解説、対訳の作成へと展開した。次時の伏線として、「ぞ…ける」の係り結びについては、特にその意義を丁寧に解説し、注目させるように心掛けた。

【第二時】文法事項解説・対訳作成（「知らず」～「タベを待つことなし」）・「主題」解説

本時においては、「知らず」以降、繰り返される〈強調〉と「主題」の関わりについて理解させ、この「主題」が学習者の未来に対する「アンチテーゼ」となっていることに特に注意させた。

【第三時】「鑑賞文」作成・相互評価・意見交流

本時においては、ワークシートを用い、「鑑賞文」を作成、回覧の上、相互評価させた。なお、「相互評価」については、今回は、あくまで意見交流を主眼としたため、印象批評のレベルで良いこととした。具体的には、評価者の作品と比較して被評価者の作品の出来具合を「良い・同等・良くない」と分類し、その根拠を記す、という方法を採った。無論、改めて指導者による評価も必要になる。「授業のねらいに合致しているか」、「制限字数を守っているか」、「国語表現上のミスはないか」の三つの観点から評価することとした。

以上は、本校での指導例であるが、工業・商業といった実業系高等学校においても、同じコンセプトの授業が展開できる。「ものづくり」の「もの」を、「教育」や「医療・看護」等、物質的な製品ではない、いわば、広義の生産として捉えるならば、普通科高等学校においても、概ね同様に対応できよう。「広義の生産」と無関係に未来を生きる学習者は、まずいないからである。

おわりに

「表現」の機能に注意することで「主題」を見通す作業を通して、私たちは「主題」定位の「方法」を学習者に伝えねばならない。そのための教材・学習材として「ゆく河の流れ」を捉えてはどうか。

また、その「主題」として見えてくる筆者の「疑問」には、学習者全てが、自身の未来のありかたを考えるための格好の材料が含まれている。授業の展開にこれを活用しない手はない。私たち指導者が目指すべきは、学習者にとって納得しやすく、そして、できるなら、学習者に何らかの「前向きな意欲」を醸成する、学習者の未来を見据えた授業の構築なのである。

〈注〉

（1）江口正弘氏は、『古典文法の研究』（尚文出版　平成七年二月）で、「連体形で終止するものはもともと倒置による強調表現である」と総括しておられる。また、高山善行氏は、「強調表現」（『国文学』第三巻第二号　学燈社　平成二〇年二月）で、「ゾ、ナム、ヤ、カ、コソ」の、特定の語句を強める「卓立強調」機能と「文全体を強調する」機能との「二種類の強調」効果について簡潔にまとめておられる。

（2）周知の通り、「主題」とは、元々文芸学用語の〝theme〟の訳であり、「中心思想」と定義付けられる。「中心思想」とは、筆者の思考の核、いわば、「筆者の強く主張したいこと」と理解されよう。原田種成氏「国文と漢文との交渉」（『私の漢文講義』平成七年二〇月　大修館書店）

（3）

（4）「仮の宿り」は、広義には「現世」そのものを指すと思われるが、「ゆく河の流れ」では、一貫して「人（主）」と「栖」「住む人」と「家」、とが一対になっており、この両者の関係性に焦点が絞られているため、「はかないこの世の一時的な住居」と訳した。

※本稿は、拙稿「高等学校古典『方丈記』の扱い方」（『国語と教育』第三六号　平成三年三月）の実践報告編であり、従って、同稿の内容を吸収したものとなっている。記してことわっておく。

「鑑賞文」作品例

問題な日本語 その4

北原保雄 編著

四六判・並製・一七六頁
定価九四五円（本体九〇〇円）

評者＝緑川育代

かつてないほどに「日本語の乱れ」が指摘されていながら、一方で「日本語ブーム」でもあるという不思議な現代を反映した好評シリーズの最新刊。数多ある「日本語本」の中でも、これほど老若男女、はたまた専門家、素人問わず楽しめる本はないだろう。今まさに巷で問題となっている用法や語彙について、質問と答えという形で明快に説明している。学術的に確かな論理に裏打ちされてはいるが、決して高所からの語り口ではなく、読みやすい。いのうえさきこ氏によるひねりの効いた漫画も、息抜きとなると共に、教育現場では生徒に興味を持たせるよい素材となろう。

しかし、何よりも感嘆に値するのは「この日本語は正しい／誤っている」という一刀両断の結論を出していない点である。とどのつまりは、言語も生き物であり、誤用も優勢となってしまえば正用に転化し得るのが実情なのである。この言語に対する真摯な姿勢が、本シリーズを「日本語本」の金字塔とするゆえんであろう。

ガリ版ものがたり

志村章子 著

四六判・上製・二八二頁
定価二五二〇円（本体二四〇〇円）

評者＝松島茂
緑図書館職員

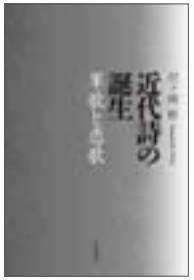
本書は、ガリ版の単なるノスタルジーの本ではない。著者が三十年間、ガリ版とガリ版に関わってきた人々を直接取材し、いわゆるガリ版文化といえるものを誠実に検証してきた成果である。もし、取材がもう少し遅かったら、ガリ版文化の大切な部分の幾らかは空白にならざるを得なかったろうと思われる。毛筆謄写版についても触れられていて興味深い。

ガリ版がものがたりとして面白いのは、ガリ版が民衆に寄り添い、若き芸術家や社会運動家、教育者ら生真面目で愛すべき人達の登場で発展した事だ。足尾銅山鉱毒事件の告発、エスペラント普及、ドイツ人俘虜収容所印刷所、生活綴方等がガリ版と人々の関わりで語られる。民衆と共にあった宮澤賢治が東京にいた時代、賢治の生活と文学的成熟にガリ版が大きく寄与したであろうことも著者は示唆している。

近年美術館でガリ版の美術展が開かれている。本書は、芸術の域にまで達したガリ版文化の奥深さに触れられる好著である。

近代詩の誕生——軍歌と恋歌

尼ヶ崎彬 著



四六判・上製・三〇六頁
定価二一〇〇円（本体二〇〇〇円）

評者＝吉田未和

「新体詩」とともに近代詩が始まったというのが日本文学史の常識である。だが軍歌が詩歌の世界を横領し、やがて急速に衰退し、排除される過程を視野に繰り入れてみると、詩史は全く異なった様相を見せる。本書の読了後には藤村の「初恋」を見る目が確かに変わっている、一言で言えばそんな本である。

人々が共通の心情を託せるほどに文学としての表現を持ち得なかった軍歌は、ついにその居場所を獲得することはできなかった。詩でないものが詩の世界から追放されるのは、いずれやってくる運命であった。

それならば本当の詩歌とは何か。明治の文人たちは、和歌でも漢詩でもない前人未踏のジャンルを確立しようと奮起する。多くの論敵を相手にしつつ、近代詩が次第に理念を整え、またそれに見合った実作が生まれる道程を追っていく筆致は、丁寧だがとても躍動的だ。軍歌の盛衰の歴史を辿ることが、同時に詩ひいては芸術の本質を明らかにすることだという視点で、本書は書かれている。

大修館 最新国語表記ハンドブック

大修館書店編集部 編

四六判・並製・二五六頁
定価七三五円（本体七〇〇円）

評者＝山田明

本書は、国語表記の目安を手軽に調べ、確かめることができるように編集されたもので、三つの特長がある。

一、「常用漢字表」や「現代仮名遣い」、「送り仮名の付け方」など、国語表記のよりどころとなる各種資料の収録。平成二二年の「常用漢字表」改定や「人名用漢字別表」などの改正にも対応しており、目安となる情報がコンパクトにまとめられている。

二、送り仮名をどう付けるか、尊敬語として適切か等々、問題となることが多い事項に関しては、編集部作成の語例集や検索表が用意されており、目当ての言葉にたどり着きやすいよう、工夫が凝らされている。

三、各種資料では取り扱われていない、同音異義語や表記の問題については、「同音異義語の使い分け」「書き間違えやすい漢字」を編集部で作成している。コンパクトなサイズでも、国語表記のさまざまな問題への対応は万全と言える。

国語表記で困ったときには、まずはこの本を調べるべき——そう断言できる内容である。